



TITLE:

京大広報 No. 733

AUTHOR(S):

京都大学総務部広報課

CITATION:

京都大学総務部広報課. 京大広報 No. 733. 京大広報 2018, 733: 4922-4974

ISSUE DATE:

2018-01-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/233045>

RIGHT:

京大 広報

Kyoto University

2018.1
No. 733



※ P4940 参照

目次

〔巻頭言〕

- 賢く群れよう京大生 4923
総長 山極 壽一

〔大学の動き〕

- 名誉教授懇談会を開催 4925
- 京都大学春秋講義（平成29年度秋季講義）を開催 4925
- 第69回京都大学未来フォーラムを開催 4926
- 第8回東南アジアネットワークフォーラムを開催 4927
- 第9回東南アジアネットワークフォーラムを開催 4929
- 総長主催「外国人研究者との交歓会（Kyoto University Reception for International Academics）」を開催 4930
- 第10回日中学長会議に稲葉理事・副学長が出席 4931
- RENKEI（日英産学連携プログラム）年次総会に稲葉理事・副学長が出席 4932
- 体育会本部が総長を訪問 4934
- 「琵琶湖周航の歌」記念碑 京大に 4934
- 11月祭を開催 4935
- 能楽鑑賞会を開催 4936
- 本学学生および職員が平成29年度「京都市スポーツ大賞」を受賞 4936
- 平成29年度「京都大学体育会スポーツ表彰」授与式を挙行政 4937
- 東京都教育委員会との連携協定に基づく高大連携事業を実施 4938
- 京都大学ヘルシーキャンパス キックオフフォーラムを開催 4940
- 平成29年度定年退職予定教員 4941

〔部局の動き〕

- 教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公開講座『ユング心理学と今日の科学的知見—夢、元型、コンプレックス、そして心理療法の効果』を開催 4945
- 第5回花山天文台応援野外コンサートを開催 4945
- 第6回国際再生リハビリテーションシンポジウムを開催 4947
- オープンホスピタル2017を開催 4948
- 平成29年度京大関係病院長協議会定例総会を開催 4949
- 平成29年度京都府原子力総合防災訓練に参加 4950

- 『エネマネハウス2017』において京都大学が最優秀賞を受賞 4951
- 思修館プログラム総括シンポジウムおよび第2回思修館の集いを開催 4952
- 在日アメリカ大使館首席公使が総合生存学館を訪問 4954
- 「博士課程教育リーディングプログラムフォーラム2017」における学生ポスター発表受賞者4名の表彰式を挙行政 4956
- 総合生存学館（思修館）において、第6回国際シンポジウムを開催 4958
- 山極壽一総長ら一行がハノイ理工科大学にて学長らへの表敬訪問および学堂ハノイ拠点を見学 4959
- 「京都大学・ハノイ理工科大学—アジア諸国に展開する地球環境学の教育・研究連携に関する国際シンポジウム」を開催 4961
- 山極壽一総長ら一行が在ベトナム日本国大使館を訪問し梅田邦夫大使と面談 4962
- 化学研究所「第117回研究発表会」を開催 4962
- 数理解析研究所が数学・数理科学4研究拠点合同市民講演会「こんなところに数学が…」を開催 4963

〔寸言〕

- 私見・京大のウリ 泉 雅文 4965

〔随想〕

- 『動物の境界』への険しい登攀路を振り返る 4966
名誉教授 菅原 和孝

〔洛書〕

- 京大と東アジアのスポーツ 高嶋 航 4967

〔栄誉〕

- 森 和俊 理学研究科教授が生命科学ブレイクスルー賞を受賞 4969

〔話題〕

- 広報倫理講習会を開催 4970
- 平成29年度総長杯ボウリング大会を開催 4970
- 社寺見学会を実施 4971
- 宇治キャンパスで総合防災訓練を実施 4971
- 宇治キャンパスで安全衛生講習会を開催 4972
- 宇治キャンパスで、リサイクルフェア・交流会を開催 4973



京都大学

巻頭言

賢く群れよう京大生

総長 山極 壽一

新年あけましておめでとうございます。

今年は戌年です。イヌと言えば、リーダーに忠実で上下の関係をよくわきまえて行動することが知られています。人間との付き合いも長く、われわれに忠実な友として人間圏の奥深くまで入って暮らしてきました。私が長らく調査してきたサルとは「犬猿の仲」と称されて相性が悪く、それは昔から野荒しをするサルをイヌによって追い払ってきたためだと考えられます。

イヌもサルも群れで暮らしますが、群れの作り方はまるで違います。イヌの群れは祖先のオオカミから受け継いだもので、リーダーを中心に狩りをするために統率のとれた体制になっています。地上で視覚と嗅覚を頼りに獲物を集団で追い詰める戦法です。一方、植物食のサルは狩りをせず、あちこちに点在する果実や葉を効率よく安全に食べるために群れを作っています。木に登るので、視覚と聴覚を頼りに仲間と交信します。食べる時には仲間と競合しないように分散し、休むときは安全を期すために集まります。リーダーのような役割を果たすオスがありますが、群れの仲間が忠誠心を持っているわけではなく、最も順位の高いオスでも短期間で群れを去るのが普通です。世界には300種を超えるサルがいて、それぞれに群がり方が違います。オスとメスが1頭ずつでペアを組むサルもいれば、オスが1頭でメスが複数、メスが1頭でオスが複数、オスもメスも複数で大きな群れを作るサルもいるのです。

人間は系統的にサルと近く、イヌのようにリーダーに忠実な統制のとれた集団を作るのは苦手なはず。チンパンジーとの共通祖先から分かれて700万年、ずっと狩猟採集生活で生計を立ててきましたが、本格的な狩猟が始まるのはここ30万年ほどに過ぎません。人間はハンターではなく、肉食動物に「狩猟されるもの」として進化をしてきたのです。だから狩猟するのにイヌの助けが必要でした。武器や飛び道具を発明したのも、人間の身体の狩猟能力が低いからです。

さて、俗に「京大生は群がらない」とよく言われます。そのため、これまで同窓会をあえて作ろうとしない傾向がありました。しかし、その真の意味は「京大生は自立独立の精神を持ち、仲間にもやみに迎合しない」ということだと私は思っています。初代総長の木下廣治は「自重自敬」という言葉を残し、自らを重んずる心は互いに尊重し合う心に通じることを説いています。これは「対話を根幹とした自由の学風」という本学の伝統的な精神風土を生み出しました。むしろ、京大生は「闊達な対話を通じて、他者に頼らない自由な発想を磨くために集まる」ことを好むはずなのです。同窓会を開いて昔の仲間と集い、これまで歩んできた道を語り合うことはこの精神を損ねるのではなく、逆にその心を保ち続けていることを確かめ合い、その風を再びわが道に吹き込むことにつながると私は思います。幸いこの数年、京都大学同窓会の数ははだいに増え始め、昨年は富山県同窓会とアフリカ同窓会が新たに加わって、国内84、海外28の同窓会を数えるまでになりました。でも、まだ本学の事務局が連絡可能な同窓生の数は約1万人、20万



人を超えられる同窓生をほとんどカバーできていないのが現状です。ホームカミングデーや11月祭などをはじめとする各種の行事や催しに同窓生の参加をもっと増やし、ご意見を直接伺って京都大学の活動に生かしたいと願っています。ぜひ、お知り合いの同窓生に連絡先の登録を呼びかけていただきたいと思います。(京都大学同窓会HP：<http://hp.alumni.kyoto-u.ac.jp/>)

さて、総長に就任してから3年の間に国立大学が目指すべき目標はずいぶん様変わりしました。教育・研究と経営が分離され、総長のガバナンス機能が強化され、自律的な資金を高め、国際競争力を強化するために産学連携が推進されるようになりました。国立大学は地域の振興に貢献する大学、ある分野で高度な教育研究を推進する大学、国際的に最先端の研究を目指す研究型大学の3つに分類され、それぞれのミッションに応じたKPI(主要業績評価指標)を立てて運営努力をすることが義務付けられています。さらに、昨年指定国立大学法人制度が始まり、京都大学は東北大学や東京大学とともに最初の指定を受けました。日本のトップの研究型大学として優遇措置を受けつつ、高い目標を掲げて歩んでいかねばなりません。ただし、この流れはもともと京都大学が目指してきた道と大きく重なっておりますので、私たちは京都大学の伝統である学術の力を強化することで十分その要請にこたえられると思っています。

この制度の指定を受けた際に、特に要請されたのは「日本の人文社会科学を牽引する」役割を担うことでした。京都大学には京都学派と呼ばれる学問の山脈がいくつもそびえています。その成果や現在の継承・発展の姿を世界へ発信するばかりでなく、京都大学が誇る文理融合の創造的な学問をもっと社会や世界へ広め、人文社会科学の強みを生かしたイノベーションの創出を図ろうと考えています。学域・学系制の組織改革によって教員の流動性や組織の柔軟性を高めたことに加え、このたび京大版プロボスト制度を開始しました。研究担当の湊 長博 理事・副学長をプロボストに指名し、各部局の教員からなる戦略調整会議を開き、京都大学の学術の多様性と独創性をいかにして将来の強みに結び付けられるかを広く深く討論しようという試みです。また、日本語で学べる学部留学生を受け入れる「吉田カレッジ構想」、大学院生の教育能力を高める研修センター、企業へのコンサルティング事業等を行う「京大オリジナル」という会社の立ち上げ、起業への投資や基礎研究を実践や社会実装に結び付けるホールディングの設立など、新しい意欲的な計画が目白押しです。ぜひ、今後の成果を期待していただきたいと思います。また、これらの計画を実現するためには現役の教職員、学生、そして同窓生の皆さんの積極的な参加が必要です。ぜひ、いっしょに京都大学の力と存在感を高めていきましょう。今年もよろしくお願い申し上げます。

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

名誉教授懇談会を開催

百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて、平成29年11月5日（日）に第90回名誉教授懇談会が開催され、54名の名誉教授の他、総長、理事、部局長等合わせて63名が参加しました。

秋に行われる名誉教授懇談会では、当該年度に名誉教授の称号を授与された教授（文系・理系各1名）による講話会を行うことが慣例となっており、文系からは西山良平 名誉教授（人間・環境学研究科）による「吉田・岡崎地区の歴史と遺跡—京大周辺が日本史の表舞台だった頃—」、理系からは佐治英郎 名誉教授（薬学研究科）による「生体分子イメージング」と題した講演が行われました。

その後の懇親会は、山極壽一 総長による本学の近況を交えた挨拶に続いて、川添信介 理事・副学長による乾杯の発声により始まりました。会場では、出席者それぞれの在職当時の思い出や出来事、近況報告等に話が弾み、盛会のうちに執り行われました。



左から、西山名誉教授、佐治名誉教授、山極総長、川添理事・副学長



懇親会の様子

（総務部（総務課））

[目次に戻る](#)

京都大学春秋講義（平成29年度秋季講義）を開催

京都大学春秋講義は、本学における学術研究活動の中で培われてきた知的資源について、広く学内外の人々と共有を図るため、昭和63（1988）年秋から開講している公開講座です。

今回は、メインテーマを「身近になった宇宙」として、2日間にわたり、合わせて4講義を行いました。1日目の平成29年11月4日（土）は、田中貴浩 理学研究科教授から「極限の宇宙

大学の
動き

「観測と対峙する一般相対性理論の世界」、海老原祐輔 生存圏研究所准教授から「オーロラから宇宙を知る—オーロラ研究の最新事情」、2日目の11月11日(土)は、土井隆雄 宇宙総合学研究ユニット特定教授から「日本の有人宇宙活動」、山川 宏 生存圏研究所教授から「ロケットと人工衛星計画の極意、そして、驚きの宇宙利用法」と題した講義がありました。2日間で1,092名の入場者があり、立ち見が出るほどの盛況ぶりでした。各講義で活発な質疑応答が行われ、「宇宙」への関心の高さがうかがえました。

参加者からは、「理論が次々に正しいことが確認されていく様子がすごい。これからの宇宙物理学の発展に期待します」、「オーロラの話が興味深かった。オーロラに色の違いが出る仕組みは初めて知った」、「国際宇宙ステーションの内部の様子が、DVDと説明でよくわかってよかった」、「政府の宇宙への関与、今後のビジネス展開等、興味深い内容でした」など多数の感想が寄せられました。



左から、田中教授、海老原准教授、土井特定教授、山川教授



会場の様子

(総務部(渉外課))

[目次に戻る ↗](#)

第69回京都大学未来フォーラムを開催

今回の京都大学未来フォーラムは、法学部卒業生の秋山咲恵 株式会社サキコーポレーション代表取締役社長を講師に迎え、平成29年12月1日(金)に百周年時計台記念館において開催しました。

「新しい価値の創造への挑戦～京大女子の冒険～」と題した講演の中で秋山代表取締役社長は、自らの経歴を冒険になぞらえ、大学に入学して新しい価値観に出会い自分を変えたいと

大学の
動き



講演する秋山代表取締役社長

いう気持ちから法学部に転部したこと、男女雇用機会均等法の初年度に社会に出て様々な困難にぶつかりながら家族や自分の考え方を変えていき、技術者のパートナーとともに産業用検査ロボットの会社を起業したこと、女性がグローバルなマーケットにものづくりで起業したことで注目されたこと、リーマンショックで売り上げが1/3に激減したときにもメーカーの未来は社会の役にたつものを作り続けることにあり新商品の開発だけはストップしないという姿勢で会社の意識を変えて乗り越えてきたことなどを丁寧に語りました。そして最後に、それまでの常識には

とらわれず、時代が変われば、新しい価値観をいち早く感じ取って、自分にとって必然性があれば勇気を持って行動する、これからもあきらめず挑戦を続け、冒険を楽しんでいきたいと話しました。

参加者からは、「今後のキャリア観や生き方を考える上で秋山さんが感じてきたこと、体験してきたことをお聞きできたのは有益だった」、「修羅場をくぐり抜けたタフな方だと思いますが、壇上ではとても謙虚にお話しされていたのが印象的だった」、「同じ京大OGとして、男性と同じ業界で頑張っている秋山さんに大きな拍手をおくりたい」などの感想が寄せられました。



講演する秋山代表取締役社長

(総務部(渉外課))

[目次に戻る ↗](#)

第8回東南アジアネットワークフォーラムを開催

京都大学ASEAN拠点では、ハノイ理工科大学において開催された、京都大学国際シンポジウム「HUST & KU International Symposium on the Education & Research of the Global Environmental Studies in Asia」の一環として、東南アジアネットワークフォーラム(平成29年10月30日(月)～11月1日(水))と同窓会の開催を支援しました。

東南アジアネットワークフォーラムは、元留学生が現地で作る同窓生組織が本学の各研究所

大学の
動き



同窓会会合で挨拶する山極総長

また山極壽一 総長、北野正雄 理事・副学長をはじめとする本学の教職員、学生など約140名が集い、盛会のうちに終了しました。

10月30日（月）に開催した東南アジアネットワークフォーラムでは、同窓生による研究発表セッションが設けられました。会場では、理学研究科、工学研究科、地球環境学舎を修了したベトナム、フィリピン、日本人の計7名が研究を発表し、今後の研究交流の拡大について情報交換を行いました。



東南アジアネットワークフォーラムでの研究発表セッション

第9回東南アジアネッ

トワークフォーラムは、引き続き11月1日（水）にインドネシアにて開催しました。第10回については2月24日（土）にタイでの開催を予定しています。



京都大学国際シンポジウム集合写真

（企画・情報部（企画課））

[目次に戻る](#)

大学の
動き

第9回東南アジアネットワークフォーラムを開催

インドネシア・ボゴール県チビノン郡にあるインドネシア科学院 (LIPI) のイノベーション・センター講堂において、平成29年11月1日(水)にLIPI、本学元留学生の同窓会組織であるインドネシア京都大学同窓会 (HAKU) を中心として、京都大学ASEAN拠点、東南アジア地域研究研究所が共催し、第9回東南アジアネットワークフォーラムを開催しました。

東南アジアネットワークフォーラムでは、元留学生が現地で組織する同窓会と連携して、本学の最新の研究成果を現地社会に還元することを最大の目的に、現地社会がいま最も関心を寄せる学術テーマをとりあげています。インドネシアでは、平成19(2007)年度から平成26(2014)年度までHAKUが毎年開催してきた京都大学東南アジアフォーラム、平成27(2015)年度からその規模を拡大した東南アジアネットワークフォーラムを合わせると、今回で11回目の開催となりました。

今回のフォーラムは、本学、LIPI、ガジャマダ大学、3月11日大学、ボゴール農科大学が産学連携をどのように強化しているのかを話し合うもので、稲葉カヨ 理事・副学長、バンバン・スビアント LIPI長官代行による開会の挨拶で始まりました。その後、バンバンLIPI長官代行、松原英一郎 産学連携本部副本部長(教授)が基調講演を行い、午後からはインドネシアで最有力の各大学・機関からの4名による教員の発表が行われました。各大学にとって産学連携は極めて重要な課題であり、関係者は熱心に耳を傾けていました。延べ人数にすると90名の参加がありました。



挨拶する稲葉理事・副学長



挨拶するバンバン LIPI 長官代行



基調講演をする松原副本部長



講演中のヌルル LIPI 研究員



講演中のクリヨ 3月11日大学教員

また、前日には、東南アジア地域研究研究所のジャカルタ連絡事務所において、インドネシアの本学元留学生や本学に縁のある研究者、インドネシアに駐在する日本人の本学OBが参加する交流会が行われ、ネットワークの幅を広げることができました。

大学の
動き



集合写真

(企画・情報部(企画課))

[目次に戻る](#)

総長主催「外国人研究者との交歓会 (Kyoto University Reception for International Academics)」を開催

百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて、平成29年10月23日(月)に総長主催「外国人研究者との交歓会 (Kyoto University Reception for International Academics)」を開催しました。これは恒例の国際交流イベントとして毎年開催しているもので、本学で教育・研究に携わっている外国人研究者、総長・理事等役員および部局長をはじめ、外国人研究者と関わりのある本学教職員が、互いの交流を深めることを目的としています。今回は、各研究科・研究所・センター等から、約300名の参加がありました。

交歓会は、三橋 紫 国際戦略本部副本部長の司会のもと、稲葉カヨ 理事・副学長による開会の挨拶によって始まりました。山極壽一 総長の挨拶では、大学の掲げるWINDOW構想に沿って、多様な研究分野について異なる視点から意見を交わすことの重要性、それらが革新的・創造的な考え方を生み出すことにもつながることなどが述べられ、参加者は熱心に耳を傾けていました。続く湊 長博 理事・副学長・プロボストによる乾杯の発声の後には、参加者それぞれが研究内容などをもとに歓談をし、互いに親交を深めました。今年度も例年通り、子どもを持つ研究者のために託児室を設けたことにより、夫婦や家族での参加がしやすくなり、交流もよ



三橋国際戦略本部副本部長による司会進行



稲葉理事・副学長による開会の辞



山極総長による挨拶



湊理事・副学長・プロボストによる乾杯の発声

大学の
動き

り一層広がりのあるものとなりました。また、会の途中には、本学能楽部狂言会の学生達により、狂言「棒縛」が披露され、会に華を添えるとともに、参加者に日本の伝統文化にも触れてもらえる良い機会となりました。

交歓会は、終始和やかな雰囲気の中、約2時間にわたり行われ、盛会のうちに終了しました。



交歓会の様子



能楽部狂言会による狂言「棒縛」

(企画・情報部(国際交流課))

[目次に戻る](#)

第10回日中学長会議に稲葉理事・副学長が出席

第10回日中学長会議が平成29年10月19日(木)～21日(土)に東北大学(中国遼寧省瀋陽市)で開催され、本学から稲葉カヨ 理事・副学長が出席しました。

本会議は、日中両国における大学間交流の活性化を目指して、日本および中国の主要大学の学長間で意見交換を行うもので、平成12(2000)年10月に東京で第1回会議が開催されて以降、第10回目を迎えました。今回は、「日中大学の発展：チャンス、チャレンジと未来」をテーマに、両国の35大学6機関から約120名が集まりました。

会議では趙継 東北大学(中国)学長の開会挨拶で始まり、松尾泰樹 文部科学省官房審議官、応中元 遼寧省外事弁公室主任、花蕾 遼寧省教育庁副庁長、石塚英樹 在瀋陽日本国総領事館総領事による挨拶に続き、郭東明 大連理工大学学長および武田廣 神戸大学学長による基調講演が行われました。



学長会議 集合写真



学長会議のレセプションで挨拶する稲葉理事・副学長

大学
の
動き

引き続き、「大学教育モデルの変革とイノベーション」、「学生のキャリア発展への挑戦と大学教育のあり方」の2つの議題で、日本・中国の各大学による取り組みについて発表の後、質疑応答が行われました。

また、同時進行で両国の大学から派遣された学生計38名による「学生フォーラム」が同時開催され、「Artificial Intelligence on Learning Revolution」と「University Students' Innovation and Entrepreneurship」「Internet Era Learning-Modes and Innovation」を3つのトピックに据えて、各学生からの発表が行われるとともに活発な議論が繰り広げられました。

閉会式では、日本の大学を代表して一橋大学から、中国の大学を代表して厦門大学の学生から「学生フォーラム」についての報告がなされ、フォーラムでの公式な議論だけではなく、日本人と中国人の学生がホテルの同室を割り当てられ、公式行事以外の時間も共有することにより、お互いへの理解がより深まったことが述べられました。最後に行われた総括では、今後の交流の深化への期待と、次回の日中学長会議では、学部から大学院への接続、教育における言語のあり方、このような学長会議を通じてどのような協力が可能かなどを議論していきたいということが述べられました。

次回は平成31(2019)年に早稲田大学の主催により開催される予定です。



学生フォーラム 集合写真

(企画・情報部(国際交流課))

[目次に戻る](#)

RENKEI(日英産学連携プログラム)年次総会に稲葉理事・副学長が出席

RENKEI(日英産学連携プログラム)の年次総会が平成29年11月15日(水)～16日(木)にサウサンプトン大学(英国)で開催され、日英の加盟校およびブリティッシュ・カウンシルから、27名(10大学・1機関)の参加がありました。本学からは稲葉カヨ 理事・副学長と国際交流課員が出席しました。

RENKEIとは、日英の大学間連携を基盤とした新しい国際産学連携の仕組みとして平成24(2012)年に設立されたネットワークです。共同研究、人材育成の分野で大学が産業界との連携強化を図り、未来のリーダー、イノベーターとなれる高度な人材を輩出する仕組みを作ることが目的として日英の12大学が加盟し、様々な研究教育ワーキンググループを展開しています。

総会は、開催校となったサウサンプトン大学のコリン・グラント副学長、およびブリティッシュ・

大学の
動き

カウンシルのマット・バーニー駐日代表の開会挨拶で始まり、今年度実施されたワークショップと参加学生奨学金の報告へと続きました。

RENKEIは来春には第1期の6年を終了し第2期目「RENKEI2.0」を迎えます。今回の総会では特に、今後の国際共同研究の展開、社会への貢献の方向性と可能性について討議が行われました。そして、平成29年8月の安倍首相とメイ首相による日英首脳会談にて発出された「繁栄協力に関する日英共同宣言」の協力枠組みにある、世界的課題への対処に両国で協働していくとの方針に沿うものとして、RENKEI2.0の共同研究主要テーマとして気候変動への対応、保健政策という2つのグローバルな課題を選定しました。

日英両国の大学の協力により課題解決に向けて取り組むため、今後このテーマに沿って新たなプロジェクトを展開していくことが確認されました。

次回の年次総会は平成30(2018)年に九州大学にて開催される予定です。



共同研究テーマ選定について意見交換



本学提案テーマ「気候変動への対応」について説明する稲葉理事・副学長

また、今回のサウサンプトン大学訪問に際し、本学とサウサンプトン大学との大学間学術交流協定の締結式を行いました。サウサンプトン大学はラッセルグループ(英国の大規模研究主導型大学24校)を構成する1校で、本学とは平成24(2012)年に大学間学生交流協定を締結しています。今回の学術交流協定締結により、RENKEIネットワーク内活動のマルチラテラルな協働からさらに交流を深化させ、2校間による一層緊密で強固な連携による国際共同研究の推進が期待されています。

【関連リンク】

RENKEI—日英産学連携プログラム:

<https://www.britishcouncil.jp/programmes/higher-education/university-industry-partnership/renkei>

京都大学が加盟している大学間国際ネットワーク:

<http://www.oc.kyoto-u.ac.jp/network/>

サウサンプトン大学: <https://www.southampton.ac.uk/>



大学間学術交流協定調印式 グラント国際担当副学長と稲葉理事・副学長

(企画・情報部(国際交流課))

[目次に戻る](#)

大学の
動き

体育会本部が総長を訪問

京都大学体育会本部の幹部交代に伴い、体育会の学生が平成29年12月4日(月)に山極壽一 総長および川添信介 理事・副学長を訪問しました。新幹部の挨拶に始まり、体育会幹事長から今年度の七大戦および双青戦の戦績等を報告した後、山極総長と川添理事・副学長へ次年度の七大戦および双青戦優勝を誓いました。

山極総長からは、「文武両道で頑張ってもらいたい。活躍を期待している」と話があり、学生一同真剣に聞いていました。



総長と体育会本部幹部との懇談



集合写真

(教育推進・学生支援部(厚生課))

[目次に戻る](#)

「琵琶湖周航の歌」 記念碑 京大に

京都大学ボート部で歌い継がれてきた旧制第三高等学校寮歌「琵琶湖周航の歌」の記念碑が、11月祭中の平成29年11月25日(土)、旧制第三高等学校のあった京都大学吉田南構内に完成しました。

この歌は、大正6(1917)年6月、旧制第三高等学校水上部員(ボート部員)だった小口太郎(明治30(1897)年～大正13(1924)年)が琵琶湖周航の途中、今津(現在の滋賀県高島市)の宿でクルーに披露し、当時流行っていた吉田千秋(明治28(1895)年～大正8(1919)年)作曲の「ひつじぐさ」に合わせて仲間で歌ったのが始まりです。叙情的なメロディーに琵琶湖の情景と人生を織りこんだ歌詞がよく合って、寮歌、学生歌として愛され、昭和46(1971)年の歌手・加藤登紀子氏の大ヒットで日本中に知られる歌になりました。現在も、体育系、音楽系学内団体だけでなく、各地の京都大学同窓会でも広く歌われています。

歌碑はステンレス製で、ボート部、医ボート部、ヨット部、カヌー部、水泳部の各OBOG会と神陵会の寄贈によるもの。琵琶湖畔では7カ所に歌碑が設けられていますが、京都大学構内



【上】「琵琶湖周航の歌」百周年記念碑英語歌詞面
【左】「琵琶湖周航の歌」百周年記念碑

大学の
動き

ではこれが初めてです。除幕式に集まったOBらは「ようやく母校に帰ってきた」と感慨深げな様子でした。

同日午後には時計台百周年記念館において、「琵琶湖周航の歌」百周年記念講演会と記念音楽祭が開催され、学内の音楽系サークルや加藤登紀子氏らの演奏の後、満席の参加者約500人による「琵琶湖周航の歌」大合唱が百周年記念ホールを包みました。



記念碑除幕式で紅白の紐を引く（左から）鈴木ボート部主将、吉田ボート部濃青会会長、川添理事・副学長、島崎吹奏楽団長



百周年記念ホールを包む「琵琶湖周航の歌」大合唱

（教育推進・学生支援部（厚生課））

[目次に戻る ↗](#)

11月祭を開催

第59回目となる11月祭が平成29年11月23日（木）～26日（日）に開催されました。

キャンパス内は100店舗以上の模擬店が出展し、おまつり広場特設ステージ（吉田南グラウンド）では音楽ライブやダンスパフォーマンスなどさまざまな催しが行われました。好天に恵まれたこともあり、学生のみならず、家族連れや中高生など多くの人でにぎわいました。

最終日にはおまつり広場でフィナーレが行われ、4日間にわたる祭典の幕を閉じました。



総人広場の様子



吉田南グラウンドの様子

（教育推進・学生支援部（厚生課））

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

能楽鑑賞会を開催

第61回京都大学能楽鑑賞会を、平成29年12月15日(金)に京都市左京区の京都観世会館で開催しました。本会は、創立記念行事音楽会とともに本学学生・教職員のための課外教養行事として毎年開催しているものです。今回は、開演に先立ち、本学能楽部観世会による「見どころ説明」も行われ、能・狂言の面白さ、見どころを英語訳を交えながらわかりやすく説明されました。



能楽部観世会による「見どころ説明」

今回の演目は、狂言「鎌腹(かまばら)」と能「葵上 梓之出 空之祈(あおいのうえ あずさのて くのいのり)」で、会場には毎年心待ちにされている方や初めて鑑賞される方など多くの来場者が訪れました。狂言の「鎌腹」では臆病な夫がとった行動が表現されている場面で笑いが起こり、能の「葵上」では、六条御息女の生霊が鬼相となって、横川小聖の祈祷と闘う場面で、鼓や笛の音も相まって会場全体が舞台に引き込まれている様子でした。

本会を一つの契機に、特に学生の皆さんが日本の伝統芸能・文化への興味と関心を一層深めていただければ幸いです。



狂言「鎌腹」



能「葵上 梓之出 空之祈」

(教育推進・学生支援部(厚生課))

[目次に戻る](#)

本学学生および職員が平成29年度「京都市スポーツ大賞」を受賞

平成29年12月22日(金)午後、立命館大学朱雀キャンパス(京都市中京区)において、「京都市スポーツ賞」表彰式が行われ、本学体育会陸上競技部所属の山西利和さん(工学部4回生)および本学職員の田原紘樹さんが、「京都市スポーツ大賞」を受賞しました。

京都市では、スポーツの分野において、スポーツに対する市民の関心を高め、競技力の向上および市民スポーツの振興等に顕著な業績のあった方に対し、その栄誉を称えるため、「京都市

大学の
動き

スポーツ賞」を贈呈し、表彰式を行っています。

山西さんは、「第29回ユニバーシアード競技大会 男子20km競歩優勝」・「天皇賜杯第86回日本学生陸上競技対校選手権大会 男子10000m競歩優勝」、田原さんは、「第65回全日本実業団対抗陸上競技選手権大会 男子やり投優勝」が評価され、今回の受賞に至りました。



表彰者集合写真



京都市スポーツ大賞を受賞された山西さん(左)と田原さん(右)

(教育推進・学生支援部(厚生課))

[目次に戻る](#)

平成 29 年度「京都大学体育会スポーツ表彰」授与式を挙

平成 29 年 12 月 23 日(土)にホテル平安の森において京都大学体育会によるスポーツ表彰授与式が挙行されました。

このスポーツ表彰は、京都大学体育会規約にある「本会は、京都大学における体育の向上、運動の普及を図り、あわせて本学学生の心身の錬磨、品性の陶冶に資し、もって学徳兼備にして有為の人材を作ることとを目的とする」という理念を実践し、それにふさわしい貢献をした部員を表彰するものとして平成 19 年度に設立され、今回で 11 回目の開催となります。

本表彰では、優秀な成績を残した選手はもちろんのこと、大学から新しいスポーツを始め、実力を大きく向上させた選手、裏方として部を支えた選手・マネージャーも対象としています。

体育会会長賞（10 名）		
山西 利和	やまし としかず	陸上競技部部
鈴木 康太	すずき こうた	ボート部
西ヶ谷紘佑	にしがや こうすけ	居合道部
村上 誉紀	むらかみ たかのり	ボート部
入山 鼓	いりやま つづみ	アメリカンフットボール部
大山 晟弥	おおやま せいや	硬式野球部
新家 佑基	あらや ゆうき	アメリカンフットボール部
田端 聖久	たばた きよひさ	準硬式野球部
中野 健人	なかの けんと	男子バレーボール部
山宮 拓馬	やまみや たくま	馬術部
体育会優秀賞（5 名）		
植村 佳史	うえむら よしふみ	アメリカンフットボール部
磯井 俊輔	いそい しゅんすけ	準硬式野球部
海士 湧平	かいし ゆうへい	アメリカンフットボール部
中坪 真希	なかつぼ まき	フィールドホッケー部
花谷 一優	はなや かずまさ	少林寺拳法部

大学の
動き

今回は、体育会会長賞10名、優秀賞5名の計15名が選ばれました。受賞者の皆さんは、それぞれ晴れやかな様子で壇上に上がり、守屋和幸 体育会長より表彰を受けました。



表彰者集合写真

(教育推進・学生支援部(厚生課))

[目次に戻る ↗](#)

東京都教育委員会との連携協定に基づく高大連携事業を実施

本学は東京都教育委員会との高大接続・高大連携に関する協定に基づき、「京都大学高校生フォーラム in TOKYO」を平成29年11月18日(土)に東京都教職員研修センター(東京都文京区)で開催しました。当日は、都立高校生等約300人が参加しました。

今回で7回目となるこのフォーラムは、首都圏の高校生が京都大学における最先端の研究成果に関する講演を聴講することにより、大学進学への目的を明確にし、進学後の自己の在り方や大学における教育研究を意識させる契機とすることを目的に開催しています。

講演に先立ち、出張吉訓 東京都教育庁教育監による開会挨拶の後、都立高校卒業生で本学へ進学した農学部2回生の篠田理沙さんが、本学の魅力や大学生活の様子を紹介するとともに、高校生へ激励のメッセージを送りました。

有賀哲也 副学長による「電子：物質の性質・変化をつかさどるもの」と題した講演では、会場の高校生へ質問を投げかけながら、光や色の変化など身近な物質に作用する電子のおもしろ



出張教育監による開会挨拶



高校生へメッセージを送る農学部2回生の篠田さん

大学の
動き

さを、最先端の研究成果とともに紹介しました。数々の興味深い話に、生徒はノートにメモを取りながら熱心に聞き入っていました。また、質疑応答の際には、多くの生徒から質問の手が挙がり、休憩時間も有賀副学長を囲み、質問する生徒が途切れることはありませんでした。

続くパネルディスカッションでは、有賀副学長、農学部2回生の篠田さんのほか、都立高校生4名も参加し、「探究すること」をテーマに活発な意見交換が行われました。壇上のパネリストからは、自分の経験談を交えた意見が述べられ、それらを受けて会場からも積極的な意見が飛び交い、学びの楽しさと知識を論証することの2つの観点から探究することについて盛んな議論がかわされました。

最後に参加者代表として、東京都立富士高等学校の生徒から有賀副学長へ御礼の挨拶があり、フォーラムは盛況のうちに閉会しました。今後も本学の魅力を首都圏の高校生へ発信できるよう、高大接続・高大連携活動のさらなる推進を目指していきます。



講演する有賀副学長



パネルディスカッションの様子

(教育推進・学生支援部(入試企画課))

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

京都大学ヘルシーキャンパス キックオフフォーラムを開催

環境安全保健機構 健康管理部門では、平成29年度から「大学から人々と社会の身体的・精神的な健康を創造すること」を目的に、ヘルシーキャンパス運動を立ち上げ、取り組みを進めています。

同機構同部門では、ヘルシーキャンパス開始年度にあたり、ヘルシーキャンパスキックオフフォーラムを、平成29年11月20日（月）に国際科学イノベーション棟にて開催しました。



朝原さんと歩こう

フォーラムの開会に先立ち、北京オリンピックメダリストの朝原宣治氏を迎えて、「朝原さんと歩こう」イベントを開催しました。約30人の学生、教職員が集合し、大学構内から吉田神社境内まで約20分、楽しく歩きました。

フォーラムは、大寫幸一郎 環境安全保健機構長の開会挨拶で始まりました。

続いて、石見 拓 同機構健康管理部門長から、ヘルシーキャンパス運動の目的と取り組みについての説明があり、大学から健康づくりを発信することの意義と決意が述べられました。また、村上圭子 京都市副市長から「健康長寿のまち・京都」の紹介、中島達弥 京都大学生生活協同組合専務理事から「生協発 健康づくりの取り組み」の紹介がありました。



大寫機構長による開会挨拶 石見部門長の講演



村上副市長のご講演



中島専務理事のご講演



山極総長からの「ヘルシーキャンパス「学生が考える健康づくり対談」ス宣言」



大学の
動き

その後、山極壽一 総長から「ヘルシーキャンパス宣言」がなされました。

引き続き行われた「学生が考える健康づくり対談」では、朝原氏と学生、山極総長、石見部門長が、健康づくりについてディスカッションを行いました。学生からは考案中の健康づくりの取り組み案の紹介もなされ、活発な意見交換の場となりました。

その後、10月にヘルシーキャンパスキックオフイベントとして開催されたウォーキングチャレンジ「Walk to the moon」の結果紹介、景品抽選会が行われ、朝原氏、村上副市長、中島専務理事、佐藤直樹 理事・副学長から当選者へ景品目録が授与されました。

最後は健康管理部門 川村 孝 健康科学センター長から閉会挨拶があり、閉幕となりました。



ウォーキングチャレンジ表彰式



川村センター長の閉会挨拶

(環境安全保健機構)

[目次に戻る ↗](#)

平成 29 年度定年退職予定教員

京都大学教員定年規程により、教員58名(教授52名、准教授4名、助教2名)が本年3月31日付けで退職の予定です。

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
文 学 研 究 科	赤 松 明 彦	文献文化学専攻 東洋文献文化学講座	インド古典哲学の研究、古典インドの言語哲学に関する研究、サンスクリット文献研究
	天 野 恵	文献文化学専攻 西洋文献文化学講座	ルネサンス期のイタリア文学に関する研究
	若 島 正	文献文化学専攻 西洋文献文化学講座	英米現代文学、特に Vladimir Nabokov の研究
	氣 多 雅 子	思想文化学専攻 思想文化学講座	京都学派の宗教哲学思想の研究 ニヒリズムの研究 親鸞浄土教の宗教哲学的研究
	横 田 冬 彦	歴史文化学専攻 歴史文化学講座	日本近世社会文化史の研究
	石 川 義 孝	行動文化学専攻 行動文化学講座	国内・国際人口移動に関する研究 在留外国人の地理学的研究
法 学 研 究 科	寺 田 浩 明	法政理論専攻 法史学講座	中国法制史に関する研究
	山 本 豊	法政理論専攻 民事法講座	法律行為・契約に関する研究、とりわけ不当条項規制における自己責任と契約正義に関する研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
法 学 研 究 科	伊 藤 之 雄	法政理論専攻 政治史講座	近現代日本の政治外交史研究
	佐々木 茂 美	附属法政実務交流センター 法科大学院準備部門	民事紛争解決過程における法理論 の役割・機能に関する研究。民事 実務の動向を踏まえた法曹養成教 育の研究
理 学 研 究 科	國 廣 悌 二	物理学・宇宙物理学専攻 核物理学講座	ハドロン・クォーク物質と関連す る分野の理論的研究および「くり こみ群法」に基づく数値物理学の 研究
	巽 敏 隆	物理学・宇宙物理学専攻 核物理学講座	高温・高密度下での核物質の新しい 存在様式の解明およびその中性 子星観測への意義に関する理論的 研究
	平 原 和 朗	地球惑星科学専攻 固体地球物理学講座	地震学、特に地震波トモグラ フィー・GPS による地殻変動・地 震サイクルシミュレーションに関 する研究
	酒 井 治 孝	地球惑星科学専攻 地球生物圏史講座	日本列島とヒマラヤ山脈を対象と した造山帯のテクトニクスと地球 環境変遷史の研究
	三 木 邦 夫	化学専攻 相関化学講座	タンパク質の構造と機能に関する 結晶学的研究
	松 本 吉 泰	化学専攻 物理化学講座	固体表面・薄膜結晶における構造 と光誘起ダイナミックスの研究
	家 森 俊 彦	附属地磁気世界資料解析 センター	太陽地球系プラズマおよび地磁気 に関する研究
	竹 村 恵 二	附属地球熱学研究施設	西南日本の第四紀変動（地殻変動・ 環境変動・地熱テクトニクス）に 関する地球科学的研究
	鍵 山 恒 臣	附属地球熱学研究施設火 山研究センター	火山活動および地熱活動の多様性 に関する研究 火山活動の予測に関する研究
	光 家 保	医学専攻 生体制御医学講座	脳波周波数解析法の開発、自律神 経の随意調節メカニズムの解明と 実用化
医 学 研 究 科	鈴 木 茂 彦	医学専攻 感覚運動系外科学講座	皮膚の創傷治癒と瘢痕、再生に関 する研究 唇顎口蓋裂に関する研究
	野 田 亮	医学専攻 分子生体統御学講座	がん化および脳発生の分子機構に 関する研究
	小 泉 昭 夫	社会健康医学系専攻 健康要因学講座	遺伝環境医学に関する研究
	菅 沼 信 彦	人間健康科学系専攻 家族看護学講座	高度生殖補助技術を用いた新たな 不妊治療法の開発、子宮移植に関 する臨床的ならびに倫理的検討
	鈴 木 眞知子	人間健康科学系専攻 家族看護学講座	小児在宅療養支援に関する研究、 アイトラッカーによる重度障害児 者のコミュニケーション力の研究
	二 木 淑 子	人間健康科学系専攻 作業療法学講座	リハビリテーション医学における 作業遂行・生活適応と認知神経科 学に関する研究
	前 川 平	輸血細胞治療部	血液学、輸血医学、細胞治療、白 血病に対する分子標的治療の開発 研究
	岡 村 均	医薬創成情報科学専攻 医薬創成情報科学講座	哺乳類の生体リズムの分子機構に 関する研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
工 学 研 究 科	山 岸 常 人	建築学専攻 建築史学講座	中世の建築空間と宗教儀式的の相互 関係、近世建築の形式・意匠の特質、 歴史的建造物の保存に関する実践 的研究
	井 手 亜 里	機械理工学専攻 バイオエンジニアリング 講座	先端イメージング工学
	中 條 善 樹	高分子化学専攻 高分子合成講座	高分子ハイブリッド材料の創出に 関する研究
	吉 田 潤 一	合成・生物化学専攻 合成化学講座	有機合成化学に関する研究
農 学 研 究 科	北 島 宣	附属農場	カンキツの栽培・生殖生理・起源 と分類・育種に関する研究、グリー ンエネルギーファームに関する研 究
	裏 出 令 子	農学専攻 品質科学講座	食料の高品質化に関する食品科学 研究
	木 村 恒 久	森林科学専攻 生物材料工学講座	セルロース系物質の新機能の開拓 および磁場を用いた構造解析に関 する研究
	西 尾 嘉 之	森林科学専攻 生物材料機能学講座	木質系バイオマス素材を主対象と した分子集合体特性の解析と高機 能材料の創製に関する研究
	今 井 裕	応用生物学専攻 動物遺伝増殖学講座	体細胞の個体形成へのリプログラ ミング誘導と家畜生産への応用に 関する研究
	福 井 清 一	生物資源経済学専攻 国際農林経済学講座	途上国における貧困削減政策の研 究、途上国における食料政策の研 究、農家行動モデルの研究
	金 本 龍 平	食品生物学専攻 食品健康科学講座	タンパク質栄養の必要量と認識機 構に関する研究
人 間 ・ 環 境 学 研 究 科	田 村 類	相関環境学専攻 分子・生命環境論講座	キラル有機物質が示す革新的複雑 系化学現象の発見と機構解明およ び一般化に関する研究
	宮 本 嘉 久	相関環境学専攻 物質相関論講座	高分子物理学に関する研究
アジア・アフリカ 地域研究研究科	杉 島 敬 志	東南アジア地域研究専攻 地域変動論講座	東南アジアの民族誌研究および人 文社会科学の基礎理論に関する研 究
情 報 学 研 究 科	五十嵐 頭 人	数理工学専攻 数理物理学講座	複雑ネットワークの構造とその中 での情報伝達に関する研究
生命科学研究科	佐 藤 文 彦	統合生命科学専攻 細胞全能性発現学講座	植物の細胞分化全能性発現、特に 二次代謝と光独立栄養性に関する 分子細胞生物学的・合成生物学的 研究
	米 原 伸	高次生命科学専攻 体制統御学講座	細胞死の分子機構と生理・病理機 能に関する研究
地 球 環 境 学 堂	岡 崎 健 二	地球親和技術学廊	建築・都市・地域社会の防災力お よびその向上策に関する研究
経営管理研究部	成 生 達 彦	経営管理講座	応用ミクロ経済学としてのマーケ ティング・流通に関する研究
人文科学研究所	井 波 陵 一	附属東アジア人文情報学 研究センター	清代の文化と社会の研究
ウイルス・再生 医 学 研 究 所	開 祐 司	生命システム研究部門	軟骨形成を中心とした運動器形成 の分子生物学的研究
エネルギー理工学 研 究 所	水 内 亨	エネルギー生成研究部門	プラズマエネルギー制御に関する 研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
防 災 研 究 所	寺 石 眞 弘	附属地震予知研究センター	横坑式地殻変動連続観測と関連する日向灘の地震活動に関する研究
基礎物理学研究所	佐々木 節	極限構造研究部門	一般相対論と宇宙論の研究
経 済 研 究 所	矢 野 誠	ファイナンス研究部門	市場の質の複雑系ダイナミクスに関する法と経済学的な理論・実証分析
原 子 炉 実 験 所	高 橋 千太郎	原子力基礎工学研究部門	原子力施設における放射線の安全管理ならびに放射線利用における人の障害防止に関する研究
	釜 江 克 宏	安全原子力システム研究センター	地震災害軽減に資する将来の地震時の強震動予測に関する研究
霊長類研究所	平 井 啓 久	ゲノム細胞研究部門	染色体の進化に関する研究
	川 本 芳	附属人類進化モデル研究センター	霊長類と家畜を対象にした集団遺伝学研究および進化系統研究
フィールド科学 教育研究センター	久保田 信	海洋生態系部門	刺胞動物の生物学的研究および黒潮系生物の自然史的研究

[目次に戻る](#)



教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公開講座『ユング心理学と今日の科学的知見—夢，元型，コンプレックス，そして心理療法の効果』を開催

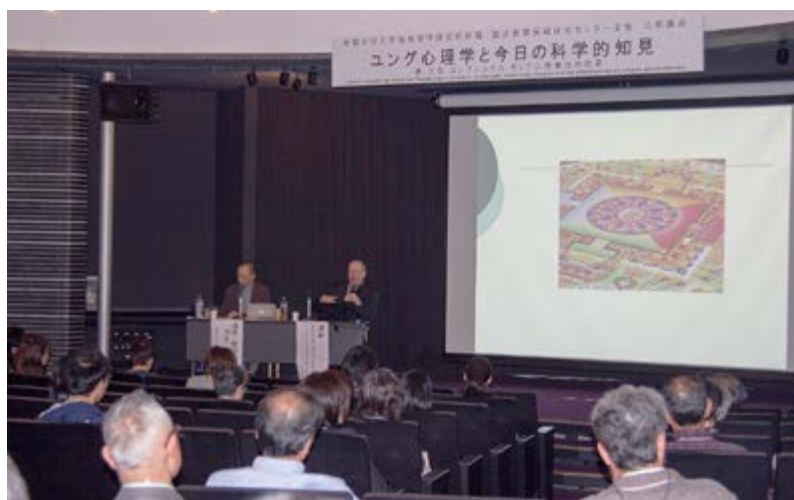
教育学研究科附属臨床教育実践研究センターでは、毎年、深刻化する教育問題への取り組みの一環として、現代人のこころの理解に主眼をおいた公開講座を開催しています。

今年度は、センター客員教授でフライブルクカトリック大学教授のクリスティアン・レスラー氏を講師として、平成29年11月23日（木・祝）の午後1時から、芝蘭会館稲盛ホールで行い、心理臨床家や医療従事者、教育関係者、学生など約100名の参加がありました。

講演では、今日の生物学、遺伝学、神経科学からの知見を参照されながら、ユングが提唱した夢、元型、コンプレックスといった概念について解説されました。そして、それらを現代的にはどのように捉え直すことができるかについて話されました。講演の後半においては、自身が行っておられる研究を紹介されつつ、ユング派心理療法の効果について論じられました。

指定討論では、主に心理療法の効果をどのように捉えるか、および臨床実践における夢の意義について、講演内容を基にさまざまな視点から議論がなされました。参加者の感想からは、最先端の研究を知ったり、考えが深まったりするよい機会となっていたことがうかがえました。

本講座は例年参加者から大変好評を得ており、来年度以降も、現代社会の複雑なこころの問題を理解するための視点を一般市民に向けて広く提供できる場となるよう開催していくことを考えています。



講演するクリスティアン・レスラー客員教授

（大学院教育学研究科）

[目次に戻る ↗](#)

第5回花山天文台応援野外コンサートを開催

理学研究科附属花山天文台では、世界的な音楽家である喜多郎氏を招いて、平成29年10月7日（土）に第5回花山天文台応援野外コンサートを開催しました。

今年度は、コンサート名を「花山天文台『応援』野外コンサート」としました。コンサート名変更の背景には、今年より始まった花山天文台を支援するためのしくみ「京都花山天文台の将来を考える会」（代表 尾池和夫 京都造形芸術大学長、元本学総長）が発足したことがあり、

部局の
動き

同会発起人の一人である喜多郎氏の発案で決まりました。

当日は、午前中は雨、コンサート直前にも小雨が降るなど、あいにくの天気となったにも関わらず、300名近くの市民が参加しました。今年のコンサートには、本学より山極壽一 総長のほか、門川大作 京都市長が出席しました。

また、コンサートには、喜多郎氏の大ファンだという音楽家の岡野弘幹氏も応援に駆けつけ、コンサートの前半には、喜多郎氏のシンセサイザーに合わせて岡野氏が笛やギターを演奏するなど、曲はほとんど即興だったにもかかわらず、見事に息の合った演奏が披露されました。

コンサートの後半には、喜多郎氏の楽曲「古事記」に合わせて宇宙のさまざまな映像・画像を同時上映する映像コンテンツ「古事記と宇宙」(Kojiki and the Universe) ライブコンサートがありました。「古事記と宇宙」は柴田一成 花山天文台長の発案と喜多郎氏とのコラボレーションのもと、花山天文台と学術情報メディアセンターとの学内共同研究成果として平成27年に完成したもので、芸術作品としてだけでなく、全編を鑑賞すると天文学入門になるように映像や画像が選ばれています。平成28年には英語ライブコンサート用も完成しました。当プロジェクトは、平成24年に奈良県大和郡山市で開催された、本学と大和郡山市のジョイントシンポジウム「古事記と宇宙」がきっかけで始まりました。喜多郎氏は今年の初めから、世界各国でこの映像ライブコンサートツアーを開催されています。

ライブ演奏開始時には雲に隠れていた月も、演奏の途中から姿を現し、演奏終了時には見事な満月となりました。聴衆はもとより、喜多郎氏自身も演奏しながら映像と満月を見て感動されていました。

コンサートの最後には、山極総長および門川市長による花山天文台を応援するスピーチがありました。

(大学院理学研究科)

[目次に戻る](#)



喜多郎氏の演奏



岡野氏の演奏



花山天文台本館の壁に投影された「古事記と宇宙」の映像の一部



コンサート最後のフィナーレのシーン（左より、柴田花山天文台長、山極総長、岡野氏、喜多郎氏、門川市長）



第6回国際再生リハビリテーションシンポジウムを開催

医学研究科人間健康科学系専攻は、平成29年11月1日(水)～3日(金)に米国ピッツバーグ大学と共催して第6回国際再生リハビリテーションシンポジウムをピッツバーグで開催し、世界各国から約200名が参加しました。

本国際シンポジウムでは、多岐に渡る研究者および臨床家が一堂に会し、この新しい再生医療の安全性・有効性・経済性を高め、困難な疾患を患った方の治癒および社会復帰を目標に討議しました。

シンポジウムでは共同大会長を務めた黒木裕士 医学研究科教授が Welcome スピーチを行いました。その中で山中伸弥 iPS 細胞研究所所長からいただいたリハビリテーションへの強い期待を述べられたビデオメッセージも紹介しました。また、各分野で活躍している研究者を計33名招聘し、最新のトピックスの共有および討議を行いました。京都大学からは櫻井英俊 iPS 細胞研究所准教授による骨格筋再生およびリハビリテーションの講演、池口良輔 医学部附属病院准教授による末梢神経再生におけるリハビリテーションの講演を行いました。日本ではまだあまり馴染みの少ない再生リハビリテーションという新しいテーマに活発な議論が交わされ、シンポジウムは盛会のうちに終了しました。



山中 CIRA 所長の祝辞を紹介する
黒木教授



櫻井准教授による講演



池口准教授による講演



共同大会長黒木教授（後列右から3番目）と Ambrosio 准教授（後列右から4番目）、および若手研究者

部局の
動き



シンポジウム参加者



シンポジウム会場の様子

(大学院医学研究科)

[目次に戻る ↗](#)

オープンホスピタル 2017 を開催

医学部附属病院では、平成 29 年 10 月 28 日（土）に、「京大病院オープンホスピタル 2017」を開催しました。このイベントは、将来の医療を担う人材および地域住民など多数の方々に、安全で安心を得られる質の高い医療を提供するため、院内の各部門が実施している活動内容を紹介し、京大病院の魅力を伝えることを目的に平成 18（2006）年から毎年開催しているもので、今年で 12 回目の開催となりました。

各診療科（部）の取り組みを紹介する「パネル展示」では、業務内容や取り組み、器具の展示・取り扱いについて職員が説明し、来場者の方に現場での活動を知っていただくことができました。また、疾患栄養治療部のインボディーによるメタボチェックや看護部のハンドマッサージなどの「体験コーナー」、さらに京大病院への就職希望者を対象にした「就職相談コーナー」や「見学ツアー」など様々



器具の説明を行うスタッフ

部局の
動き

な企画を実施し、将来医療の道を志しておられる方から近隣住民の方まで、たくさんの方にご参加いただき、大盛況のうちにイベントを終えることができました。

今後もオープンホスピタルを通して、実際に現場で働く職員が自ら京大病院の魅力を伝え、たくさんの方々に医学部附属病院の活動や取り組みを知っていただけるよう努めていきます。



解説を行うスタッフ



当日の院内の様子

(医学部附属病院)

[目次に戻る ↗](#)

平成 29 年度京大関係病院長協議会定例総会を開催

医学部附属病院は、去る平成 29 年 10 月 20 日（金）に平成 29 年度京大関係病院長協議会定例総会を芝蘭会館にて開催しました。本協議会は、同会員である関係病院長が親睦を深めるとともに、医学の進歩発達および病院経営の合理化を企画することを目的として年 1 回、定例総会を開催しているものであり、学内外から 170 名余りが参加しました。

定例総会では、稲垣暢也 病院長の開会挨拶、「京大病院の現状」について、高折晃史 副病院長より「京大病院整備計画について」、平井豊博 教授（呼吸器内科長）、辻川明孝 教授（眼科長）、松村由美 教授（医療安全管理部長）より新任者挨拶、小西靖



講演を行う稲垣病院長

部局の
動き

彦 教授（医学研究科附属医学教育推進センター長）より「臨床実習について」、黒田知宏 教授より「個人情報保護について」報告が行われました。

続いて、これからの臨床研究について、松田秀一 教授（副病院長／整形外科長）より「医療法に基づく臨床研究中核病院の承認」、森田智視 教授（医学統計生物情報学／臨床研究総合センター データサイエンス部長）より「臨床研究総合センターの臨床研究支援への取り組み」、竹之内沙弥香 特定講師（倫理支援部）より「中央倫理審査委員会（central IRB）の運用に向けて」、黒田真稚恵 弁護士（産官学連携本部法務部門医学領域法務ブランチ）より「臨床研究法の概要紹介」について、それぞれ報告が行われました。その後、松田教授がコーディネーターとなり、パネルディスカッションが実施されました。パネリストに報告者3名を加えて、これからの臨床研究について議論が繰り広げられました。さらに質疑応答では、関係病院の先生方との活発な意見交換が行われるなど、充実した定例総会となりました。



パネルディスカッションの様子

(医学部附属病院)

[目次に戻る](#)

平成 29 年度京都府原子力総合防災訓練に参加

医学部附属病院では、平成 29 年 11 月 12 日（日）に、綾部市立病院において開催された平成 29 年度京都府原子力総合防災訓練（京都府主催）に参加しました。訓練の統括コントローラーを務める小池 薫 医学部附属病院初期診療・救急科教授による訓練開始指示の後、傷病者受入準備および傷病者受入訓練を実施しました。

傷病者受入準備では、訓練コントローラーおよびチームリーダーを務める医師の指導の下、資機材や処置室の養生、汚染防護服の着用を行い、傷病者の受入に備えました。

傷病者受入訓練では、救急隊から傷病者を引き継ぎ、森 智治 医学部附属病院初期診療・救急科医師の指揮の下、情報収集、サーベイメーターによる放射線量の測定および負傷部位の処置を実施しました。

このような実動訓練に参加することにより、処置室の養生方法から傷病者受入時の処置にいたるまで、机上訓練では、見落としがちになる点を再確認することができました。

部局の
動き



処置の指示を行う森医師



処置を行う医療チーム

医学部附属病院は、原子力災害拠点病院に指定されており、原子力災害に対する対応が求められていることから、今後も実動訓練への参加や教育・研修の実施を通して、原子力災害医療に関する専門的知識および技能の維持・向上に努めていきます。

(医学部附属病院)

[目次に戻る ↗](#)

『エネマネハウス2017』において京都大学が最優秀賞を受賞

『エネマネハウス2017』の表彰式・講評会が平成29年12月16日(土)、グランフロント大阪 うめきた SHIP HALLにて行われ、京都大学チームが最優秀賞を受賞しました。



最優秀賞受賞の様子1 (左より：進藤拓哉さん(建築学専攻修士課程2回生)、稲本佳奈さん(同1回生)、村上周三 エネマネハウス2017審査委員長(一般財団法人建築環境・省エネルギー機構 理事長))



最優秀賞受賞の様子2

“エネマネハウス”とは大学と民間企業等の連携により、先進的な技術や新たな住まい方を提案するZEH※のモデル住宅を実際に建築し、住宅の環境・エネルギー性能の測定・実証や、展示を通じた普及啓発を行うプロジェクトです。

※ZEH：ネット・ゼロ・エネルギー・ハウス(年間での一次エネルギー消費量が正味ゼロの住宅)

京都大学チームでは、工学研究科建築学専攻の計画系研究室(柳沢究研究室/居住空間学講座)と環境系研究室(小椋大輔研究室/建築環境計画学講座生活空間環境制御学分野)が中心となって、伝統的な町家にZEH化したコアを挿入することで、その空間構成や装いの魅

部局の
動き



表彰式 全体写真



表彰式 京都大学チーム

力を保ちつつ各種性能を向上させるとともに、生活文化の継承や地域コミュニティの再生にも後援する持続可能な住まい方のモデルを提案しました。

モデル住宅は、23の企業の協力と京都市の後援を受け建築され、平成29年12月2日(土)から17日(日)まで、大阪市うめきたサザンパークにて一般公開が行われました。

【エネマネハウス 2017 のホームページ掲載の審査結果】

<https://www.enemanehouse.jp/award/index.html>



【上】「まちや+こあ」モデル住宅の内観
【左】「まちや+こあ」モデル住宅の外観

(大学院工学研究科)

[目次に戻る](#)

思修館プログラム総括シンポジウムおよび第2回思修館の集いを開催

総合生存学館では、平成29年10月18日(水)、今までの思修館プログラムの活動を振り返る総括シンポジウムを、国際科学イノベーション棟にて開催しました。

シンポジウムの第一部では、まず、寶 馨 総合生存学館長の挨拶で始まり、本プログラムと学生の活動報告を行いました。8名の学生から「探求、京都、フォロワーシップ、Ph.D.」の4つのキーワードに分けた発表がありました。第二部では、基調講演とパ



寶 馨 総合生存学館長による挨拶

部局の
動き

ネルディスカッションを行いました。まず初めに、山極壽一 総長より開会挨拶があり、続いて三浦和幸 文部科学省高等教育局大学振興課長より、来賓挨拶としてリーディングプログラム誕生の経緯や思修館への強い期待が述べられました。

その後、北野正雄 理事・副学長、プログラム履修生である白石晃将氏、森 雅彦 DMG森精機株式会社代表取締役社長から基調講演がありました。

引き続き行われたパネルディスカッションでは、久能祐子 S&R財団理事長、有本建男 政策科学研究院大学教授、岩澤康裕 電気通信大学教授、中村和男 シミックホールディング



学生の活動報告（上段左から長沼祥太郎さん、河崎レイチェル慧さん、田中勇伍さん、徐ソウさん、下段左から孫燁さん、平野実晴さん、関大吉さん、石田菫さん）



山極総長による開会挨拶



三浦課長による来賓挨拶



基調講演（左から北野理事・副学長、森代表取締役社長、白石氏（プログラム修了生））



パネルディスカッション（左から久能理事長、有本教授）



パネルディスカッション（左から岩澤教授、中村代表取締役 CEO、ポリコ事務所長）

部局の
動き

ス株式会社代表取締役 CEO, シブリー・チャールズ・ポリコ FAO 駐日事務所長がパネリストとして登壇し、「グローバルリーダーの育成のための国際教育について」、「総合生存学の研究について」、「京都大学の大学院改革と思修館の試みについて」、の3つのサブテーマで話され、フロアからの質問や意見を挟み、活発な議論が続けられました。最後に、思修館プログラムの総括ステートメントを参加者全員が拍手で賛同し、総括シンポジウムを終了しました。

シンポジウム後は、場所をホワイエに移し、第2回思修館の集いを開催しました。

湊 長博 理事・副学長による開会挨拶によって始まった集いでは、あちらこちらで歓談の輪が広がるとともに、藤原 洋 株式会社ブロードバンドタワー代表取締役会長兼社長 CEO および望月春文 東京中小企業投資育成株式会社代表取締役社長から、参加者を代表してコメントが寄せられました。最後には、北野理事・副学長より閉会挨拶があり、閉幕となりました。



第2回思修館の集いにおける
山極総長の歓談の様子

(大学院総合生存学館(思修館))

[目次に戻る ↗](#)

在日アメリカ大使館首席公使が総合生存学館を訪問

アメリカ大使館・総領事館から、大使館の日米交流を深める活動の一環として、日米関係に関心のある学生の声を聞き意見交換を行いたいとの要望が総合生存学館に寄せられ、平成29年11月16日(木)にJoseph Young 在日アメリカ大使館首席公使の訪問を受けました。Young 首席公使のほか訪問されたのは、Teresa Galler 在日アメリカ大使館コントロールオフィサー, Karen Kelley 駐大阪・神戸アメリカ総領事, Brooke Spelman 駐大阪・神戸アメリ



Young 首席公使



写真左から, Galler コントロールオフィサー, Spelman 領事, Kelley 総領事, Young 首席公使, Hwang 領事, Fishwick 領事,

部局の
動き

カ総領事館広報担当領事, Colin Fishwick 同政治経済担当領事, Helen Hwang 同商務担当領事, 中西えり 同広報担当者の合計7人です。

教員との懇談会では、本学を代表して川添信介 理事・副学長から挨拶があり、続いて池田裕一 総合生存学館副学館長から総合生存学館の紹介を行いました。同学館からは、池田副学館長、山敷庸亮 専攻長、Ialnazov, Dimiter Savov 教授、河合江理子 教授が参加し、総合生存学と学館における教育研究に関して活発な意見交換が行われました。

引き続き、本学館学生との意見交換がありました。本学館から15名の学生が参加し、外務省の専門調査員としてエジプトに滞在している学生からSkypeによる参加もありました。最初に、自己紹介を兼ねて自身の研究内容や日米関係に関する思いを伝えました。1人ひとりの発表にYoung首席公使は大いに関心を示され、時折質問をはさみながら熱心に聴いておられました。その後、国際問題の課題解決の方向性などについて意見交換を行いました。終了時刻になっても名残惜しく話をしている場面がありました。「今、国際社会はこの大学院が輩出しようとして



左から山敷専攻長、池田副学館長、川添理事・副学長、河合教授、Ialnazov教授 川添理事・副学長



教員との懇談会の様子

自己紹介を兼ねて自身の研究内容や日米関係に関する思いを伝える学生



意見交換の様子



Skype で参加した、外務省の専門調査員としてエジプトに滞在している学生



いる人材を求めている」というYoung首席公使の暖かい激励の言葉を受け、それぞれの学生の思いをさらに強くする貴重な意見交換会となりました。



アメリカ総領事館首席公使一行と交流を深める学生 学生との記念写真

(大学院総合生存学館(思修館))

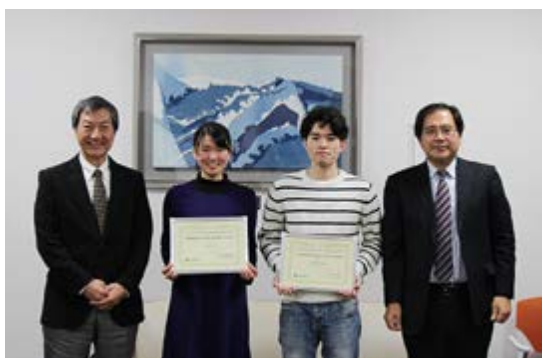
[目次に戻る](#)

「博士課程教育リーディングプログラムフォーラム 2017」における学生ポスター発表受賞者 4 名の表彰式を挙行

平成 29 年 11 月 20 日 (月)、博士課程教育リーディングプログラムフォーラム 2017 の学生ポスター発表で Future Leader Award を受賞した、思修館プログラム履修生の長沼祥太郎さん (大学院総合生存学館 5 年生)、パン宇年さん (同学館 3 年生)、関大吉さん (同学館 2 年生)、前田里菜さん (同学館 2 年生) 4 名の表彰式を行いました。

「博士課程教育リーディングプログラムフォーラム」は、各プログラムが目指す人材養成目的や教育の特色および成果の発信、ならびに今後、社会へはばたく修了者への期待に繋げるとともに、プログラム同士の情報共有の場としてそれぞれの教育内容を高めていくことを目的として平成 24 (2012) 年度からほぼ毎年開催されています。今年度は「リーディングプログラムのレガシーと修了生への期待」をテーマとして、10 月 20 日 (金) から 21 日 (土) にかけて、名古屋マリオットアソシアホテルにて開催されました。幹事校である名古屋大学を筆頭に全国 30 大学 62 のリーディングプログラムの参加がありました。

今回受賞した賞は、Industrial, Academia, International の 3 つの区分に分かれ、産業界、学術・教育界、グローバルにおいてリーダーとして活躍することが期待される学生に授与される賞です。当日参加した企業・大学・国際機関・NPO などの関係者により、厳正な審査が行われ、



左から川井プログラムコーディネーター、前田さん、長沼さん、實学館長



左から川井プログラムコーディネーター、パンさん、関さん、實学館長

部局の
動き

受賞者が決定されました。各区分で約40～70件のポスター発表の中から6～11件が受賞し、すべての区分で受賞者を出したのは思修館プログラムのみという快挙を果たしました。

フォーラム開催後、幹事校の名古屋大学から表彰状が届き、寶 馨 総合生存学館長と川井 秀一 思修館プログラムコーディネーターから表彰状が贈られ、受賞者4名の健闘を称えました。

フォーラム当日の様子などは総合生存学館やフォーラムのホームページをご覧ください。

【総合生存学館のホームページ】

修了生登壇のニュース

<https://www.gsais.kyoto-u.ac.jp/blog/2017/12/01/20171020-2>

フォーラムへの参加・受賞のニュース

<https://www.gsais.kyoto-u.ac.jp/blog/2017/11/08/20171020>

学生ポスター発表受賞者表彰のニュース

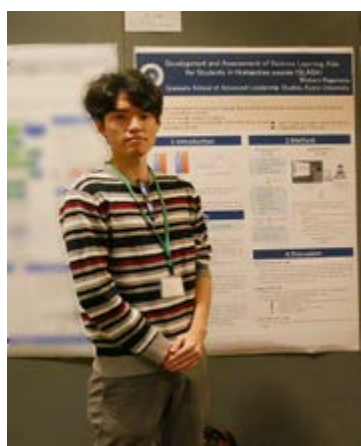
<https://www.gsais.kyoto-u.ac.jp/blog/2017/11/21/20171020-3>

受賞者のコメント

<https://www.gsais.kyoto-u.ac.jp/blog/2017/12/01/20171020-3b>

【フォーラムのホームページ】

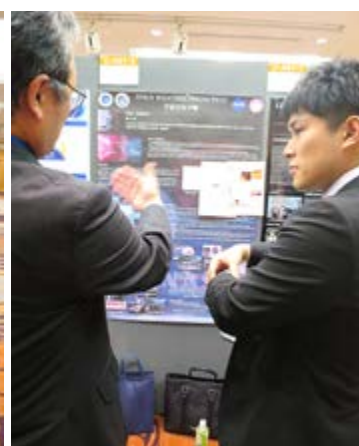
<http://www.leading.nagoya-u.ac.jp/LF2017/>



ポスター発表する5回生の長沼さん



ポスター発表する3回生のバンさん



ポスター発表する2回生の関さん



ポスター発表する2回生の前田さん



フォーラムに参加した長沼さん、バンさん、山敷先生、関さん、前田さん、土田さん

(大学院総合生存学館(思修館))

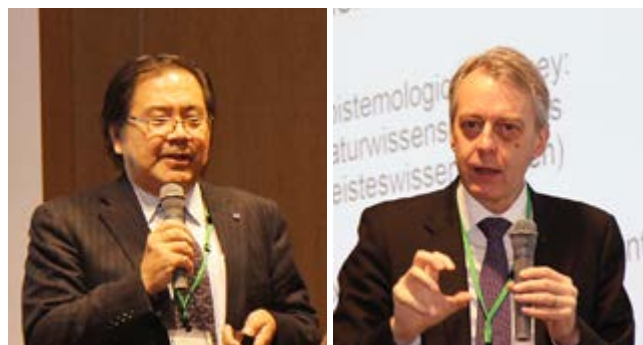
[目次に戻る](#)



総合生存学館（思修館）において、第6回国際シンポジウムを開催

大学院総合生存学館（思修館）では、平成29年12月7日（木）に第6回国際シンポジウム「Bridging the Divide Between Science and Culture: The Role of Human Survivability Studies」を国際科学イノベーション棟にて開催しました。

シンポジウムでは、寶 馨 総合生存学館長の挨拶で始まり、ジョン・クローリー博士（UNESCO人文社会科学部門研究セクション担当者）による基調講演「「アントロポセン（人新世）」を代表して」に続いて、「人智の溝をどのように埋めたらよいのか—認識論的パラダイムと異文化の対話—」「文化遺産保護の科学」「科学と文化の間の溝をどのように埋めたらよいのか—芸術とテクノロジーの融合の観点—」の3つのテーマに基づいて講演が行われました。



寶学館長による開会挨拶

クローリー博士による基調講演

総合生存学館大学院3年生のチャールズ・ポリコさんによる、学生ポスター展示の趣旨説明があり、講演の休憩時間に学生一人ひとりがポスターについて説明をし、質問に答えていました。

引き続き行われたパネルディスカッションでは、クローリー博士、ピエール・ケイ CNRS 研究センター長、宮城俊作 宗教法人平等院代表役員、土佐尚子 情報環境機構教授、藤田正勝 総合生存学館特定教授、川井秀一 同特定教授、趙 亮 同准教授がパネリストとして登壇



学生ポスター展示



学生ポスター展示 2



ケイ センター長



宮城代表役員



土佐教授

部局の
動き



パネルディスカッション



シンポジウムの講演者・登壇者



光山特定教授による閉会挨拶

し、フロアからの質問や意見を挟み、活発な議論が続けられました。

最後に、光山正雄 総合生存学館特定教授による閉会挨拶があり、盛況のうちに終了しました。

(大学院総合生存学館(思修館))

[目次に戻る](#)

山極壽一総長ら一行がハノイ理工科大学にて学長らへの表敬訪問および学堂ハノイ拠点を見学

ハノイ理工科大学にて開催の「京都大学・ハノイ理工科大学—アジア諸国に展開する地球環境学の教育・研究連携に関する国際シンポジウム」への出席の機会を利用して、山極壽一 総長ら一行は、平成29年10月30日(月)午後、ハノイ理工科大学学長を表敬訪問しました。本学側は、山極総長と北野正雄 理事・副学長他、地球環境学堂と農学、工学、人間・環境学、アジア・アフリカ地域研究の各研究科の現・副・前部局長からなる10名とその他教職員らが、ハノイ理工科大学側は、Hoang Minh Son 学長、Tran Van Top 副学長他、部局長らからなる11名が、本部棟迎賓会議室で面談しました。面談は、Son学長、山極総長それぞれによる自校の紹介に始まり、今までの教育・研究連携、今後のさらなる学術交流について話題が進みました。ハ



ハノイ理工科大学学長訪問で京都大学の国際交流活動を説明する山極総長

部局の
動き

ノイ理工科大学とはすでに大学間学術交流協定が、さらに学生交流協定も地球環境学舎とハノイ理工科大学環境理工学部と部局間で締結されています。懇談の後には、山極総長、Son 学長間で記念品の交換が行われ、その後、記念撮影をしました。

迎賓会議室でのハノイ理工科大学学長への表敬訪問から、シンポジウム会場への移動の機会を利用して、山極総長ら一行は、地球環境学舎が拠点を設置している環境理工学部を訪問しました。訪問では、環境理工学部の各種実験室とともに、同学部に平成20(2008)年12月に設置した地球環境学舎オフィスおよび実験室を見学しました。地球環境学舎オフィスには、テレビ会議システム、事務機器等が設置され、現地協力教員のNghiem Trung Dung 環境理工学部長および Nguyen Pham Hong Lien 講師の管理のもと事務員を雇用し、地球環境学舎との研究・研究教育活動が実施されています。また、地球環境学舎の学生の長期インターン研修、研究調査のベースとして活用されてきました。

その後一行は、シンポジウム会場で他の参加者に合流し、Welcomeレセプションに出席しました。



山極総長（右）から Son 学長（左）への漆器のプレゼント



ハノイ理工科大学環境理工学部学舎オフィスでの記念撮影（右端 Dung 学部長）



環境理工学部実験室の見学風景

（大学院地球環境学舎）

[目次に戻る ↗](#)



「京都大学・ハノイ理工科大学 — アジア諸国に展開する地球環境学の教育・研究連携に関する国際シンポジウム」を開催

本学との共同主催校であるベトナム・ハノイ理工科大学において、地球環境学の教育・研究連携に関する国際シンポジウムを開催しました。本シンポジウムは、概算要求機能強化経費やJSPS拠点交流経費の支援、および在ベトナム日本大使館、JSPS、JICA、JASSO、京都大学ベトナム人留学生会の後援のもと実施されました。参加者はアジア・欧米15ヶ国70組織（51大学、23企業その他）からの研究者や学生、日越環境関連企業など、合計286名（大学252名、企業その他34名）が参集しました。

開催日程は10月30日（月）～11月1日（水）の3日間で、北野正雄 理事・副学長の開催の辞、田中宏明 工学研究科教授らの基調講演に続き、サブセッションでは教育研究や産学連携の国際化、若手研究者や学生による環境関連研究の発表がおこなわれ、活発な議論が交わされました。

翌日の国際共同研究に関する全体セッションでは、Tran Van Top ハノイ理工科大学副学長と山極壽一 総長から開会の辞が、柳 淳 在ベトナム日本大使館次席公使から祝辞が述べられた後、山極総長らの基調講演とパネルディスカッション（コーディネーター：縄田栄治 農学研究科長）で、国際共同研究に関する様々な意見交換がなされました。最終日には、ハノイ近郊のチャンアン世界遺産景観や、ナムソン廃棄物処分場へのスタディツアーが実施され、3日間に渡るシンポジウムの全日程が終了しました。

なお、本シンポジウムの期間中、地球環境学堂（舟川晋也 学堂学舎長）との学生交流協定継続（ハノイ理工科大学、ダナン大学、王立農業大学、ボゴール農業大学）の調印式、総長、理事らによる在ベトナム日本大使館大使、ハノイ理工科大学学長への表敬訪問、サテライトイベ



サブセッションでの活発な議論



山極総長の基調講演



学生交流協定調印式



シンポジウムでの集合写真



ントとして京都大学同窓会による懇親会（参加者140名）、ベトナム大学生・高校生を対象とした京都大学留学フェア（参加者60名）も開催され、多岐にわたり大変充実した内容となりました。

（大学院地球環境学堂）

[目次に戻る ↗](#)

山極壽一総長ら一行が在ベトナム日本国大使館を訪問し 梅田邦夫大使と面談

ハノイ理工科大学にて開催の「京都大学・ハノイ理工科大学—アジア諸国に展開する地球環境学の教育・研究連携に関する国際シンポジウム」（平成29年10月30日（月）～11月1日（水））への出席の機会を利用して、山極壽一 総長ら一行は、10月31日（火）午前、在ベトナム日本国大使館を訪問しました。京大からのメンバーは、山極総長、北野正雄 理事・副学長、藤井滋穂 地球環境学堂教授ら7名で、梅田邦夫 特命全権大使、中馬 愛 二等書記官と面談しました。梅田大使は、1978年法学部卒の京大同窓生であり、前々日（10月29日）開催された京都大学ベトナム同窓会にもご出席いただきました。また、今回の国際シンポジウムでは在ベトナム日本国大使館から後援をいただいています。

面談は、まず山極総長が同窓会参加・シンポジウム後援のお礼を述べ、続いてKyoto iUPなど京都大学の教育・研究に関する国際戦略について説明しました。一方、梅田大使からはベトナムにおける教育・研究現況、とりわけ日本との交流についてお話を伺うことができました。約1時間の活発な面談の後、大使館玄関前で記念撮影をし、訪問は終了しました。



在ベトナム日本国大使館にて（中央が梅田大使）

（大学院地球環境学堂）

[目次に戻る ↗](#)

化学研究所「第117回研究発表会」を開催

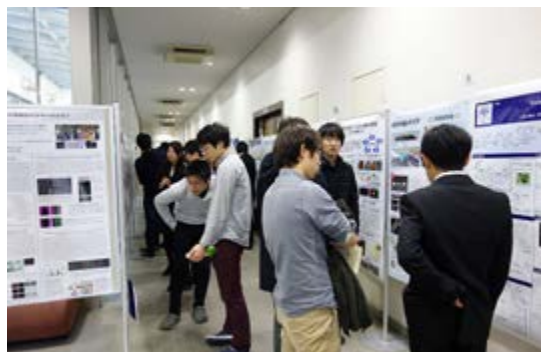
化学研究所は、平成29年12月1日（金）に宇治キャンパス内共同研究棟大セミナー室を主会場として第117回研究発表会を開催しました。午前は、森下弘樹 化学研究所助教、森山貴広 同准教授、川本 純 同助教、田村武幸 同准教授、鈴木克明 同助教らがそれぞれ最新の研究成果を発表しました。午後からは、「京大化研奨励賞・京大化研学生研究賞」の授与式を

部局の
動き

挙行し、引き続き受賞者6名(京大化研奨励賞:岩本貴寛 化学研究所助教・竹内勝彦 同助教・Le Quang Phuong 京都大学外国人共同研究者、京大化研学生研究賞:菅原知紘 理学研究科博士2回生[有機元素化学研究領域]・藤森詩織 理学研究科博士2回生[有機元素化学研究領域]・范 唯佳 工学研究科博士2回生[高分子制御合成研究領域])のうち、岩本、竹内、菅原、藤森、范の5氏が受賞講演を行いました。また、共同研究棟ライトコートでは64件のポスター発表が行われました。その後、昨年度の「化研らしい融合的・開拓的研究」に採択された3件の研究課題として、機能性濃厚ポリマーブラシの伸張状態のpMAIRS法による定量的評価(下赤卓史 助教)、外部磁場による鉄触媒反応制御(岩本 助教)、The Evolutionary History of PIP5K Subfamily B Genes in Core Eudicots (BLANC-MATHIEU, Romain 助教)に関する成果報告がありました。本研究発表会は、一般、関連研究機関、所内から延べ130名を越える参加者を得て、最先端の多彩な研究成果の判りやすい発表と活発な討論により盛況のうちに終了しました。なお、終了後には化学研究所所属の教職員・大学院生ら多数が参加して、生協会館にて本会の懇親会が行われました。



青山副所長と受賞者6名



ポスター発表会場



口頭発表会場

(化学研究所)

[目次に戻る](#)

数理解析研究所が数学・数理科学4研究拠点合同市民講演会「こんなところに数学が…」を開催

数理解析研究所では、「こんなところに数学が…」をテーマに数学・数理科学4研究拠点合同で市民講演会を平成29年11月25日(土)に開催しました。本市民講演会は、大学共同利用機関である情報・システム研究機構統計数理研究所と数学・数理科学に係る共同利用・共同研究3拠点(京都大学数理解析研究所、九州大学マス・フォア・インダストリ研究所、明治大学先端数理科学インスティテュート)が連携し、それぞれの機関において行われている共同利用・共同研究事業の内容を基に、社会と数学との係わり合いおよびその重要性について紹介することを目的として、平成27年から毎年1回各拠点で開催しているものです。

部局の
動き

本市民講演会は、主催者を代表して、山田道夫 数理解析研究所長の開会の挨拶で始まり、続いて、西井知紀 文部科学省研究振興局学術機関課長、湊 長博 理事・副学長による挨拶がありました。



開会の挨拶をする山田所長



挨拶をする西井課長



挨拶をする湊理事・副学長

その後、4つの機関の講演者が登壇し、それぞれの研究内容から身の回りに関わる「数学」を紹介しました。間野修平 統計数理研究所准教授は「認識の超幾何」、神山直之 九州大学マス・フォア・インダストリ研究所准教授は「数学で社会の『しくみ』を作る」、山口智彦 明治大学研究・知財戦略機構特任教授・先端数理科学インスティテュート副所長は「渦は静かにまわる」、熊谷 隆 数理解析研究所教授・副所長は「カード・シャッフルとマルコフ連鎖」と題した講演を行いました。



講演を行う間野准教授



講演を行う神山准教授



講演を行う山口副所長



講演を行う熊谷副所長



閉会の挨拶をする樋口所長

最後に、樋口知之 情報・システム研究機構統計数理研究所長が総括および閉会の挨拶を行い、本市民講演会は盛会のうちに終了しました。

当日は寒いなか、中高生、大学生や中学・高校の教員、数学に興味のあるシニアの方まで100名を超える参加者があり、数学・数理科学の最先端の研究成果の一端に触れる貴重な機会となりました。

(数理解析研究所)

[目次に戻る](#)

寸言

私見・京大のウリ

泉 雅文



大学入学は1971年だから、本人の意識とは別に半世紀近くも昔のことになる。自宅は埼玉、高校は都立だったので、関西に進学する人は回りにおらず、「箱根の山を越えた」という感覚を強く持った。一方、入学してみると、北陸や新潟、秋田の出身者が案外多くいて、日本海縦貫での交流の強さを感じた。当時は鉄道が長距離移動の中心だったから当然だったのだろう。

教養部があった時代で、法学の講義で林 良平 教授（民法）が、「君達は入学したといって遊んでばかりだが、東京の学生はしっかり勉強をしている。負けないようにしっかり勉強しなさい」と言われたことだけを覚えている。しかしながら、教養部2年間を通じて合計4回の試験の時は全てストに突入し、追試とレポートで単位をもらった。「沖縄返還」などというスローガンはあったが、学部になった3回生以降は、法学部はストはしなかったから、結果的に見れば、試験逃避のサボリストだったということになる。ただ、サボりの後ろめたさと下宿にいてもすることがないので、今出川通りの喫茶店の進々堂に自主ゼミと称して集まってワイガヤをしていた。

法律にイマイチ魅力を感じなかったので、消去法で政治学を指向し、ゼミは福島徳壽郎 教授のゼミを選んだ。福島先生は地味なので、高坂、勝田という当時の政治学としては人気のゼミに比べると人数は少なく、我々の時は7人だった。その分、先生との距離は近く、飲み会の二次会で何回かは自宅に深夜にわたってお邪魔もしたし、ゼミ旅行もつきあってくれた。福島先生は、本を一冊も出していない先生で、ゼミ以外の授業も全部取ったが、当時は何を教えたいのかよく分からなかった。今になって思うと、「教養としての政治学」を目指していたのだと独断している。学者を目指さない大半の学生にとっては意味のあることだと感謝している。（ただし、同期の7人中2人は学者になったが…）

4回生直前までゼミ委員会の活動をしていたし、周囲には司法試験受験組も多くいて、慌てて4回生で卒業する気になれず、当然のごとく5回生へ。5回生の夏頃、学部の地下（J地下）にあった掲示板を見ていたら国鉄の入社試験の案内が貼ってあった。鉄道マニアの要素と勉強していた公務員試験とも矛盾しないので受験した。締め切り間際だったので、大阪駅近くにあった大阪鉄道管理局に、わざわざ願書を持って行ったのを覚えている。

以上、「追憶の京大逍遙」的な内容になったが、振り返ってみれば、モラトリアムそのものの学生生活を送ったことになる。最近、文系学部の存続意義が問われ、すぐ社会に役立つ大学教育を求める声も強い。また3回生後半からは就職活動に突入するなど、ゆとりがなくなっているようだ。仕事に就けば、否応なしに時間の急流に漕ぎ出すことになる。個人差はあるだろうが、人生100年時代、数年間くらいは時間の流れから外れて、「のんびり」する（よくいえば教養を身につける）時期が人生のどこかには必要ではないか。東京でない、京都だからこその特権であると思う。仕事柄、国の役人の方々（最近はOBが増えたが…）ともよく飲むが、「入省面接に京大の志望者は後から来るから、その辺は計算に入れている」と最近も聞いたから、「のんびり」は全滅していないようだと思っただけである。

（いづみ まさふみ、四国旅客鉄道株式会社取締役会長 昭和51年法学部卒業）

[目次に戻る](#)

随想

『動物の境界』への険しい登攀路を振り返る

名誉教授 菅原 和孝



小学5年生のとき「動物学者になってアフリカへ行こう」と決意した。1969年3月下旬理学部の入学手続きのため上洛する行き帰りで、サルトルの『自由への道』に没入した。鐘楼に立て籠もったマチウは、過去の躊躇に復讐するように、ドイツ兵に銃弾を放つ。この一発は「おれが書こうとしなかった本のために」ずぎゅーん。「ぼくは生きのびて本を書こう」と心に誓った。バリエード封鎖された大学で、科学と革命をめぐる地を這うような議論を繰り返した。2回生の秋に、狸谷の安アパートで同宿だった親友とメルロ＝ポンティ著『行動の構造』読書会を敢行し、「この人と同じように闘えばよい」と思いさだめた。吉本隆明の「転向論」にも影響を受けた。私の転向は30代になってから「動物学者」という少年期の夢を裏切り、人類学へ越境したことである。だが、在職期間が残り5年を切ってから民族動物学へ回帰し『狩り狩られる経験の現象学—ブッシュマンの感応と変身』（京都大学学術出版会）を退職寸前に上梓した。これが畢竟の大作の前半部＝民族誌篇にあたる。

「理論書ならどれだけ長くても出します」—弘文堂の名編集者の豪気なことが千載一遇の機会をもたらした。退職直後から過激な執筆に集中して股関節を痛め、ジョギングを中断した。満身創痍で2016年10月下旬脱稿、同12月上旬再校了、2017年2月刊行。予備校生のころ「校正は忘れた頃にやってくる」という格言に爆笑したのは遠い昔話である。

メルロが死の半年前の遺稿で進化論に疑義を呈したことは、積年の気がかりだった。フッサールが追求した「現象学的還元」に従い、科学の説明を括弧入れしたまま、生活世界の内部から「展成」（“evolution”の新訳）に触れる—これが自らに課した到達目標だった。今まで曖昧にしてきた問いに自前の解を与えるべく苦闘した。犬や猫を〈意味ある他者〉として捉え、牧畜民と家畜との共生を支える「交通」^{コミュニケーション}を照らし、物欲ニヒリズムが支配する社会で「天敵」と対峙する途を探る。ビーグル号船上のダーウィンとの対話を経て、骨身に染みついた〈啓蒙の近代〉を内省する。伊谷純一郎の社会進化論の軸だった近親性交回避^{インセスト}を主体形成の問題として了解しなおす、等々。もしメルロにもっと「残り時間」があつたら、わたしと似た路を辿って展成を肯定したのではなかろうかと夢想する。

この「反時代的考察」を自分ではとても気に入っている。中学生の頃から耽読してきた大量のSFから、各章にぴったりのエピグラフを選んだことはわれながら快挙だった。これでやっと次作への登山口に立ったわけだ。次に目ざす頂は、曖昧にしてきたもっとも深刻な問いを解くことだ—狩猟採集民研究の意味とは何か？ わかるはずもない自分の「残り時間」についてつべこべ言うことは傲慢だという卓見をどこかで読んだから、私はライフワーク『原野の人生』をいずれ完成させるつもりだ。ところで、渾身の傑作の売れ行きは思わしくない。『動物の境界—現象学から展成の自然誌へ』（718頁、4500円/税別）。乞うご愛顧。ぼく自身のための広告（©ノーマン・メイラー）でした。

（すがわら かずよし、平成27年退職 元大学院人間・環境学研究科教授 専門は社会人類学）

[目次に戻る ↗](#)

洛 書

京大と東アジアのスポーツ

高嶋 航



まもなく平昌で冬季オリンピックが開催される。さらに、二〇二〇年には東京オリンピック開催も予定されており、東アジアのスポーツに対する関心は高まっている。と言いたところだが、少なくとも東アジアのスポーツの「歴史」については、関心が高まっているとは言いがたいのが実情である。

私は東洋史を専攻しているが、ここ一〇年ばかり東アジアのスポーツの歴史を研究しつつ、母校である京都大学、とりわけ戦前の京都帝国大学と第三高等学校にも関心を寄せてきた。今回、京大広報に執筆の機会を与えられたので、戦前の京都帝大・三高と東アジアのスポーツの関わりを紹介したい。

京都帝大初代総長 木下広次がスポーツ（当時の言葉で「運動」）に深い理解を持っていたことは、「英国人の対世界的思想を涵養せるものにして学校に於ける徳育の源は聖書に非ずして寧ろ<フットボール>に在り」という言葉からもうかがえる。一方、三高の初代校長で、毎年入試のところに「出現」する折田先生像で知られる折田彦市も、体操伝習所に勤務した経験を持ち、三高の前身である大阪専門学校長時代に早くも体操や歩兵操練を取り入れている。

折田の息子 有信は三高のエースだった。一九一七年四月に三高校庭でおこなわれた一高三高戦（当時は全国的に注目される試合だった）で一高の伝説的投手 内村祐之（内村鑑三の息子、のち東京大学名誉教授、プロ野球コミッショナー）と投げ合い、一二対二で勝利している。この勝利は三高にとって自校グラウンドでの初勝利だった。一説によると、折田はその二年前にはじまった大阪朝



一九一六年の三高野球選手（前列左端が折田、その右横が朴）出典：服部喜久雄（1954）『一高対三高野球戦史』服部喜久雄

日新聞社主催の全国中等学校優勝野球大会（のちのいわゆる「夏の甲子園」）の創設にも関わったという。この大会で折田は審判をつとめた。優勝は京都二中だった。一九二一年に京都帝大経済学部を卒業した折田は、同年四月に南満洲鉄道株式会社に就職する。この年の夏、満洲から初めて全国中等学校優勝野球大会に代表が送られた。大連商業である。一九二〇年代前半の大連商業は強豪校として知られ、一九二六年には準優勝を果たしている。折田は満洲で選手、審判として野球の振興に貢献した。

折田は、初めて全国中等学校優勝野球大会に出場した朝鮮人チームとも深い関係がある。先に触れた一高三高戦で右翼を守っていた朴 錫胤は、その後三高のエースとして活躍、一九二三年に東京帝大を卒業後、朝鮮の徽文高等普通学校野球部監督となった。同年、徽文は全国中等学校優勝大会に朝鮮地区代表として出場、大連商業を破って準々決勝に進出し、立命館中学に惜敗した。朴のチームメイト古海忠之は満洲国総務庁次長となるが、満洲国でも野球に関わった。

時代を遡れば、日露戦争直後の大連で最初にスポーツをしたのが貝瀬謹吾であった。貝瀬

洛 書

は一九〇一年に京都帝大を卒業後、鉄道技手となり、野戦鉄道運転班車輜長として日露戦争に出征、ロシア人の商店で発見したテニスのボールとラケットを持ち、ロシア人が作ったコンクリートコートで仲間らとテニスを始めた。貝瀬は野鉄庭球倶楽部を組織してテニスの振興につとめただけでなく、柔道や剣道の発展にも尽力し、のちには満洲体育協会理事をつとめた。一方、満洲で最初に野球をしたのも京都帝大卒業生である。一九〇七年に京都帝大を卒業し満鉄調査部に就職した平野正朝が中心となり、一九〇八年三月に満洲で最初の野球試合がおこなわれた。初期の満洲野球界では山西恒郎、猪子一到ら三高関係者が幅をきかせていた。京都帝大のラグビー黄金時代を担った星名 泰も満洲で活躍した。大連一中から三高に入った三田 勇は東京帝大時代にボート代表としてベルリンオリンピックに出場した。このベルリンオリンピックでは田島直人と原田正夫という京都帝大の卒業生と在学生在が三段跳で金メダルと銀メダルを取るという快挙を成し遂げた。ベルリンの京都帝大関係者には、陸上競技の松野栄一郎、バスケットボールの松井 聡がおり、松井のチームメイト廉 殷鉉は、のち延禧専門学校から京都帝大に入学した。

一昨年のリオデジャネイロオリンピックでは文学部卒業生の竹内亜弥が七人制ラグビー代表として活躍した。久々の京大オリンピックであり、初めての京大女性オリンピックであった。東京オリンピックでも京大関係者の活躍を是非期待したい。

(たかしま こう、大学院文学研究科准教授 専門は東洋史)



大連北公園テニスコート（一九〇五年一一月）出典：貝瀬謹吾（1938）『小松台文存：貝瀬謹吾君還暦並在満三十五年記念集録』貝瀬謹吾君還暦並在満三十五年記念出版事務所



大連最初の対外野球戦 米軍艦対若葉会（一九〇九年九月）出典：上西隆男（1941）『平野正朝先生還暦記念集』平野正朝先生還暦記念集刊行會

[目次に戻る ↗](#)

栄
誉

森 和俊 理学研究科教授が生命科学ブレイクスルー賞を受賞

理学研究科生物学専攻の森 和俊 教授が、2018（平成30）年生命科学ブレイクスルー賞を受賞しました。今回の受賞は、疾患の原因になりうる細胞内の異常なタンパク質を細胞内小器官の小胞体がどのように検知しているのか、異常タンパク質の集積を修復する仕組みを解明した研究に対するものです。

生命科学ブレイクスルー賞は、アーサー・レヴィンソン氏（アップル会長）やセルゲイ・ブリン氏（Googleの共同創業者）、マーク・ザッカーバーグ氏（Facebookの創業者）等を設立者とするブレイクスルー賞財団が、2013（平成25）年に創設した賞の一つで、難病治療や延命に貢献する研究を行った研究者に対し贈られます。2013（平成25）年には、ノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥教授（iPS細胞研究所）も同賞を受賞しています。



（大学院理学研究科）

[目次に戻る ↗](#)

話題

広報倫理講習会を開催

平成29年11月28日(火)、国際科学イノベーション棟5階シンポジウムホールにおいて広報倫理講習会を開催しました。この講習会は、主に広報担当者を対象として、本学において定めている「広報にかかる基本方針」および「広報倫理ガイドライン」の内容を理解し、今後の活動に生かすことを目的として開催しています。

はじめに、廣中理絵 総務部広報課長より、開会の挨拶および講師の藤本一郎 弁護士(弁護士法人創知法律事務所)の紹介がありました。引き続き、藤本弁護士から、「広報の失敗例～なにがまずかったか～」をテーマとして講義が行われました。特に、コンプライアンス違反や著作権の問題については、実際の事例紹介を交えて詳しく解説され、参加者は熱心に聞き入っていました。



藤本弁護士による講義



講義の様子

(総務部(広報課))

[目次に戻る](#)

平成29年度総長杯ボウリング大会を開催

平成29年10月20日(金) 午後6時30分からROUND1京都河原町店において、平成29年度総長杯ボウリング大会が開催され、48チームが参加しました。会場では、投球ごとに大きな歓声が上がリ、ストライクやスペアが出るたびにハイタッチを交わす姿が見られ、参加者は互いに親睦を深めていました。



優勝の南西地区共通事務部「ジャスティス」チーム



準優勝の附属図書館「図書館魂リターンズ」チーム
個人優勝(男性の部) 今井政敏さん(前列左)



個人優勝(女性の部) 菅原佐知子さん(右から2人目)

話題

大会結果は次のとおりです。

<団体>

優勝：南西地区共通事務部「ジャスティス」チーム（1,135ピン）

松原 努，山田大輔，清藤美紀，川本美由紀

準優勝：附属図書館「図書館魂リターンズ」チーム（1,131ピン）

今井政敏，北條風行，高井勝善，鈴木秀樹

<個人>

男性 優勝：今井政敏（附属図書館）（354ピン）

女性 優勝：菅原佐知子（吉田南構内共通事務部）（336ピン）

（総務部（人事課））

[目次に戻る ↗](#)

社寺見学会を実施

平成29年11月11日（土），平成29年度京都大学社寺見学会『秋の石清水・西山をたずねて』が行われ，48名が参加しました。善峯寺（京都市），石清水八幡宮（八幡市），神応寺（八幡市），松花堂庭園・美術館（八幡市）を巡り，参加者は秋晴れの空の下，色づき始めた木々の中で，それぞれの専門分野の講師の解説に熱心に聞き入っていました。

善峯寺と石清水八幡宮では秀麗な建築に触れ，神応寺では重要文化財である行教律師坐像を間近に拝観，松花堂庭園・美術館では美しい庭園を思い思いに散策しました。

当日，解説いただいた講師は次のとおりです。

〈建築〉山岸常人（工学研究科教授）

〈造園〉柴田昌三（地球環境学堂教授）

〈美術〉根立研介（文学研究科教授）



石清水八幡宮にて記念撮影（1号車）



石清水八幡宮にて記念撮影（2号車）

（総務部（人事課））

[目次に戻る ↗](#)

宇治キャンパスで総合防災訓練を実施

宇治キャンパスでは平成29年10月30日（月）に，宇治市東消防署の協力のもと宇治市で震度6弱の地震（南海トラフ地震）が発生したことを想定した，総合防災訓練が行われました。

これは京都大学危機管理計画（地震編）に対応する訓練に，地震時の安否確認・情報伝達

話題

の要素を加え、負傷者や火災の発生等、現実的な想定のもと、組織的な避難誘導・情報伝達を総合的にシミュレーションするものとなっています。教職員で組織する自衛消防地区隊を中心に、その他の教職員、学生などキャンパス全体で総勢1,000名以上が参加し、初期消火や安否情報伝達、避難誘導、負傷者の救護、また避難状況の集計等、様々な場面が設定され、参加者は、各自の役割を確認しながら実践しました。

避難訓練後は、宇治市東消防署の指導による消火器操作訓練も行い、参加者は熱心に説明を聞き、実際に消火器を手にとって体験しました。

訓練終了後には、宇治地区世話部局長 岸本泰明 エネルギー理工学研究所長の挨拶、宇治市東消防署予防消防課長 角田哲也氏からの講評の後、消防署の方と自衛消防地区隊を中心とした参加者との意見交換も行われ、盛況のうちに終了しました。



世話部局長 岸本エネルギー理工学研究所長による挨拶



安否情報を集計する対策本部



負傷者の救助訓練



避難訓練の様子



消火器操作訓練



角田課長による講評

(宇治地区事務部)

[目次に戻る ↗](#)

宇治キャンパスで安全衛生講習会を開催

宇治キャンパスでは平成29年11月7日(火)、宇治事業場衛生委員会主催ならびに宇治地区総合環境安全管理センター共催による安全衛生講習会を開催しました。

話題

この講習会は、宇治地区の教職員や大学院生等を対象に「年間安全衛生管理計画」の一環として開催しているもので、今回は、柳澤 明 光明総合研究所代表を講師に迎え、「これで事故は防げる！アクシデントフリーキャンパスの実現に向けて」～あなたの実験・作業は、本当に安全ですか？～をテーマに講演い



松田一成 宇治事業場衛生委員 講演を行う柳澤氏
会委員長による挨拶

ただきました。講演では、労働安全衛生法と大学における安全衛生などを解説いただきました。また、柳澤氏は、平成19(2007)年の宇治地区総合環境安全管理センター立ち上げ時に特定職員として勤務されていたこともあり、宇治事業場の安全衛生管理の成り立ちと歩みについて説明いただきました。

講演に続き、宮井信和 総合環境安全管理センター特定職員より「化学研究所における“良好な状態の実験室”と“要改善の必要な実験室”」について、具体例での解説がありました。

次に柳澤氏、中村正治 宇治地区総合環境安全管理センター長、竹内勝彦 化学研究所助教、大学院生の菅原知紘さん、学部生の岩上真子さんが登壇し「これから…事故・災害を起こさないために」をテーマにケーススタディーを行いました。

最後に柳澤氏による「本日の安全宣言(唱和)」が行われ、盛会のうちに閉会しました。



ケーススタディーを行う中村センター長、柳澤氏



ケーススタディーを行う竹内助教、菅原さん、岩上さん



ケーススタディーの様子

(宇治地区事務局)

[目次に戻る](#)

宇治キャンパスで、リサイクルフェア・交流会を開催

外国人研究者・留学生に対する支援の一環として、宇治地区関係者から遊休品の提供を受け、無償で外国人研究者・留学生に提供するリサイクルフェアの開催は今年で12回目となり、例年と同様、外国人研究者・留学生と教職員との交流会も平成29年11月6日(月)に同時開催しました。

話題

リサイクルフェア会場となった、宇治おうばくプラザ ハイブリッドスペースには、関係者の協力により集まった約960点の物品が並べられ、研究者、留学生や、その家族など75名の来場者がありました。

毎年大人気のこの催しは、家具から電化製品、布団類、衣服や食器といった日常用品、子供用雑貨やおもちゃなど様々な物が出品され、単身者にも家族連れにも喜ばれており、隣の交流会会場では、参加者はお茶を片手に和やかな雰囲気の中、お互いの交流を深めました。

また、交流会コアタイムには、宇治地区研究所の所長等も参加し、岸本泰明 エネルギー理工学研究所長の挨拶の後、時任宣博 化学研究所長および渡邊隆司 生存圏研究所長の紹介と挨拶があり、出張中の中川 一 防災研究所長からはメッセージが伝えられました。

その後、参加者の自己紹介タイムが設けられ、引き続き行われた電化製品等の抽選会で会場は大いに盛り上がりしました。

宇治キャンパスでは、年間、外国人研究者約500名、外国人留学生約150名が研究のために来訪、滞在しており、今後もこういった生活支援事業を続けていく予定です。



リサイクルフェアの会場に入場する留学生や外国人研究者



リサイクルフェア会場の様子



交流会コアタイムでのエネルギー理工学研究所 岸本所長の挨拶



交流会の様子

(宇治地区事務部)

[目次に戻る](#)